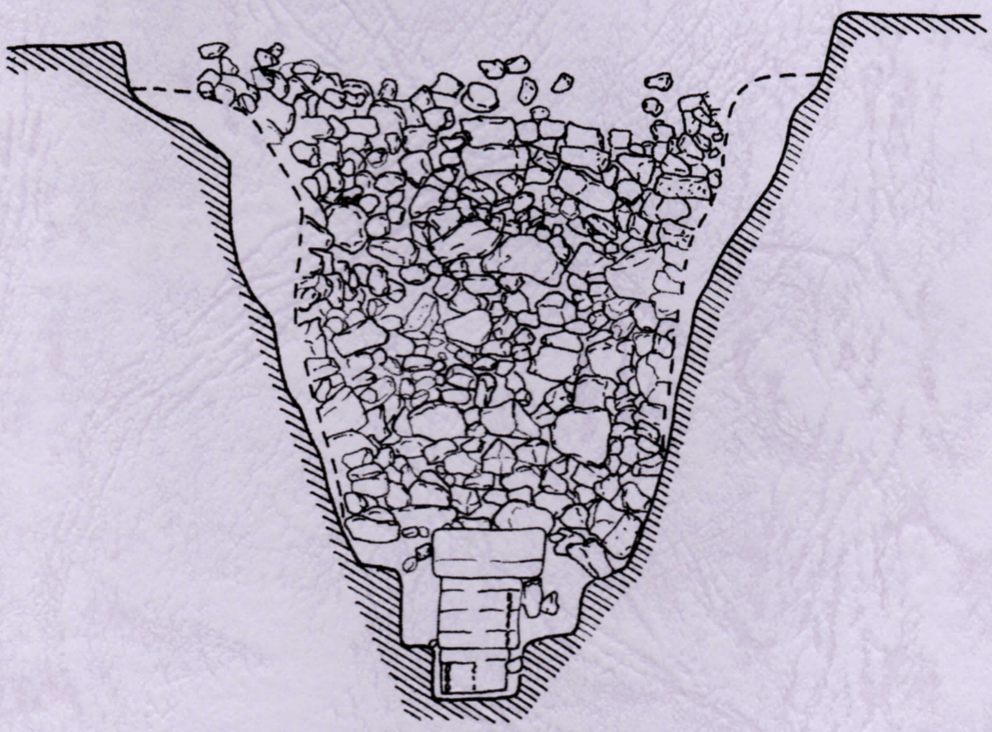
奈良井遺跡発掘調査概要報告書

— 四條畷市中野所在 —



２００３年1月

四條畷市教育委員会

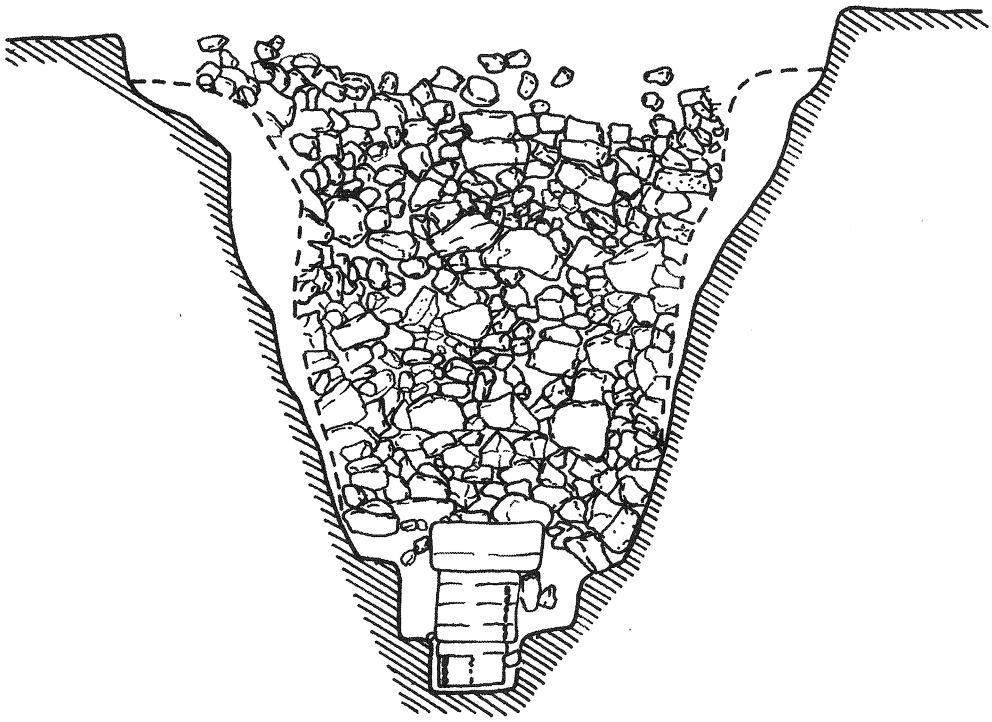
巻頭図版

1．遠　　景（西から）

2．井戸１ 断ち割り状況（南から）

奈良井遺跡発掘調査概要報告書

― 四條畷市中野所在 ―



２００３年1月

四條畷市教育委員会

例　　言

1　本書は、四條畷市教育委員会が平成14年度（2002年）に実施した、四條畷市中野３丁目433－1他に所在する奈良井遺跡における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。発掘調査は、平成14年８月19日に着手し、同年10月７日に終了した。

2　発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育部生涯学習課 主任 野島 稔の指導のもと技師職員 村上 始を担当者とし実施した。

3　発掘調査を実施するにあたっては、岡嶋 恒一氏の御理解・御協力を得ることができた。記して厚く感謝の意を表する次第である。

4　発掘調査中には、㈶枚方市文化財研究調査会理事長 櫻井 敬夫氏の御指導を賜った。また出土遺物の墨書文字解読については、独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室 室長 渡邊 晃宏氏・山本 崇氏、赤外線写真撮影については、同写真資料調査室 中村 一郎氏の各氏に依頼し、御協力・御教示を賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。

5　本書の執筆は、村上 始が行なった。

6　出土遺物の整理・実測については、村上 始・佐野 喜美・長井 光子が行なった。

凡　　例

1　本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いている。

2　本書中の座標の記録は、kmを単位とする。方位は磁北を示す。

3　土色及び遺物の色調は、1998年度版『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

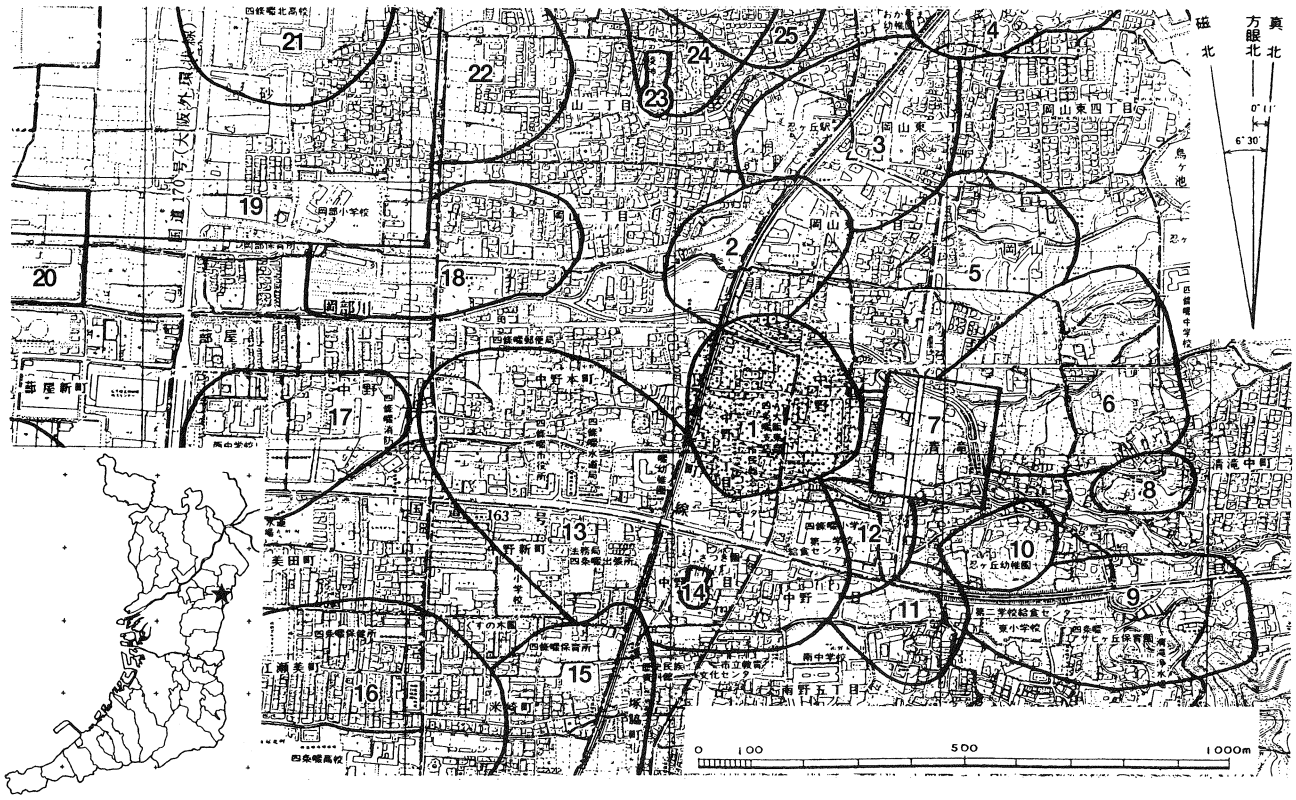
本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……1
第２章　調査に至る経過……3
第３章　調査の成果……7
第４章　ま　と　め……25
図　　版
報告書抄録

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置しており、奈良井遺跡は四條畷市中野・中野３丁目・中野本町に所在する。この遺跡は、東西約310m・南北約300mの範囲が古墳時代・中世の集落跡・祭祀跡として周知されている。

今回調査した中野３丁目433－１　他は、京街道守口宿から清滝峠を越え、国境にいたる清滝越道（清滝街道）に面したところに立地している。



１：奈良井遺跡	９：城遺跡	17：鎌田遺跡	25：更良岡山遺跡
２：南山下遺跡	10：大上遺跡	18：奈良田遺跡	
３：忍ヶ丘駅前遺跡	11：木間池北方遺跡	19：讃良郡条里遺跡	
４：坪井遺跡	12：四條畷小学校内遺跡	20：蔀屋北遺跡	
５：岡山南遺跡	13：中野遺跡	21：砂遺跡	
６：清滝古墳群	14：墓ノ堂古墳	22：北口遺跡	
７：正法寺跡	15：南野米崎遺跡	23：忍岡古墳	
８：国中神社内遺跡	16：雁屋遺跡	24：更良岡山古墳群	

第１図　周辺遺跡分布図

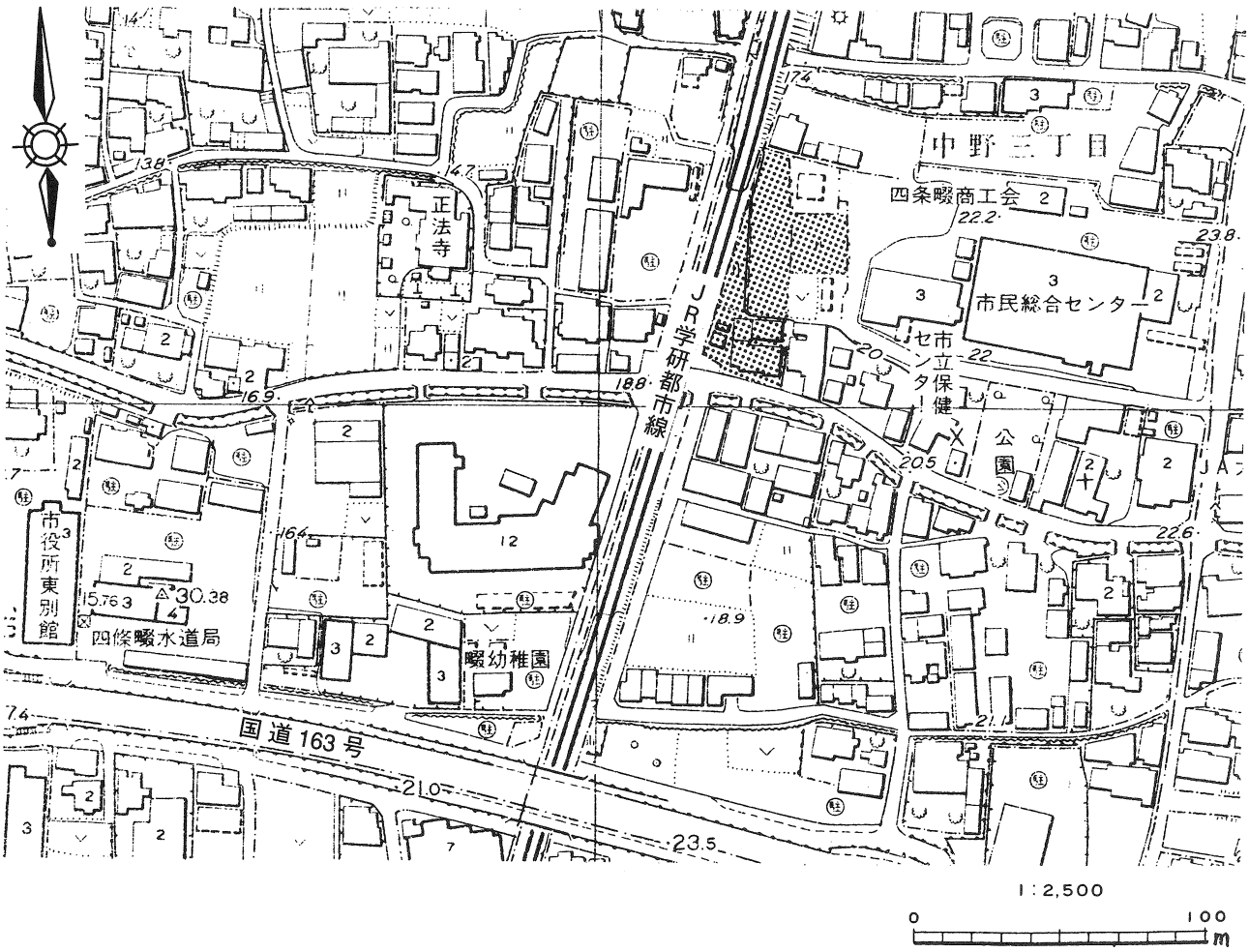
奈良井遺跡では、過去数次の発掘調査を行なってきている。特に今回の調査地区の隣接地については、昭和51年から昭和53年の国鉄片町線複線化工事に伴う埋蔵文化財発掘調査において古墳時代の落ち込み状遺構・Pit群・石敷製塩炉を検出しており、また昭和54年度の市民総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査においては、人形や馬形の土製品やミニチュア土器とともに馬を埋葬した祭祀遺構を検出している。これらのことから奈良井遺跡は、古墳時代から中世までの集落跡・祭祀跡として周知されている。

以下当遺跡と周辺の遺跡について概観を述べる。

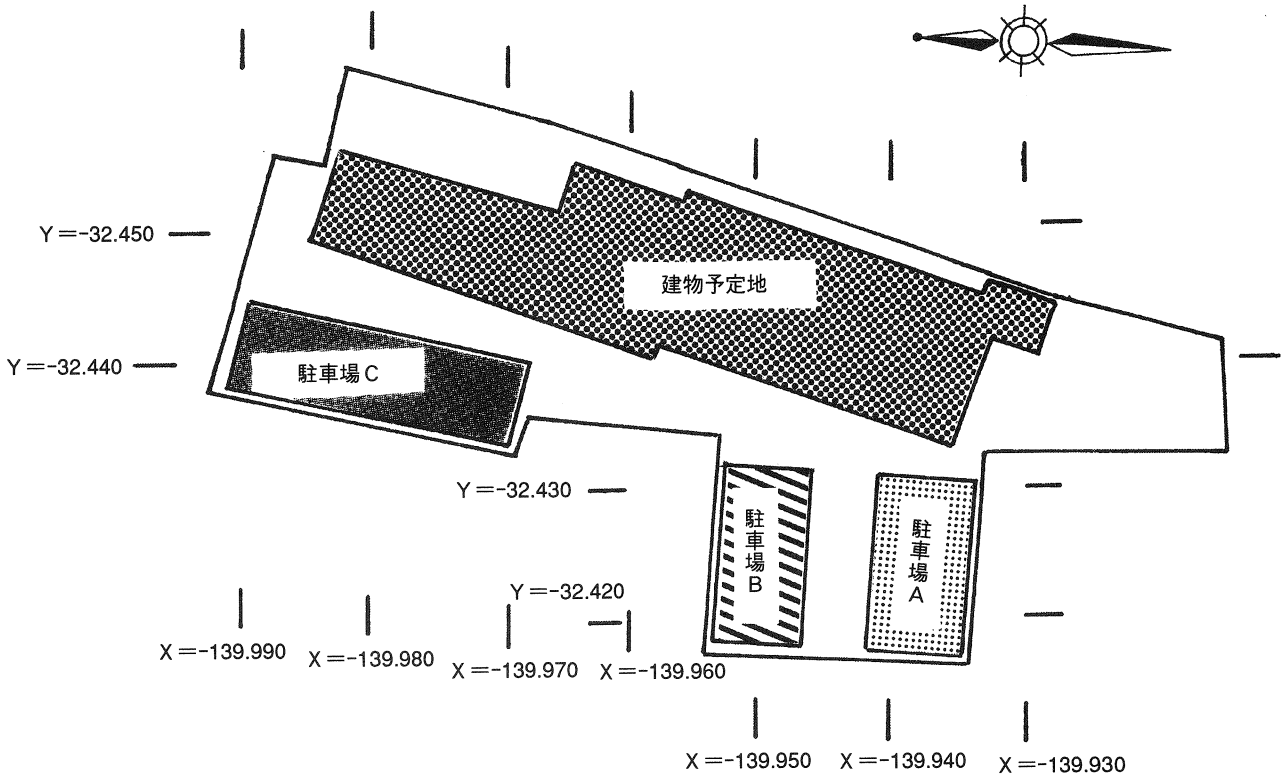
旧石器時代の遺跡としては、削器・彫器・ナイフ形石器・細石器・ハンドアックスなどが出土した更良岡山遺跡（讃良川川床遺跡）や有舌尖頭器が出土した南山下遺跡があげられる。縄文時代の遺跡としては、南山下遺跡・更良岡山遺跡・四條畷小学校内遺跡・清滝古墳群などがあり、中期から晩期の遺物が数多く出土している。弥生時代の遺跡としては、前期に始まり中期から後期に大集落を営む雁屋遺跡や前期の土器が出土した四條畷小学校内遺跡があげられる。古墳時代の遺跡としては、前期の忍岡古墳を始めとし、中期～後期になると墓ノ堂古墳・清滝古墳群・大上遺跡・城遺跡・木間池北方遺跡・四條畷小学校内遺跡・忍ヶ丘駅前遺跡などで古墳が築かれる。またこの時代は、家形埴輪や木製下駄などが出土した岡山南遺跡、犬形・水鳥形・鶏形などの動物埴輪や人物埴輪など大量の埴輪や土器類が出土した忍ヶ丘駅前遺跡、馬形埴輪・人物埴輪などが出土した南山下遺跡、初期の須恵器や勾玉・管玉・臼玉など大量の玉類・製塩土器などが出土した中野遺跡、人形や馬形の土製品やミニチュア土器とともに馬の首を埋葬した祭祀遺跡である奈良井遺跡、水田跡と祭祀具をのせるための装飾台や楽器のスリザサラ・馬骨などが出土した鎌田遺跡、準構造船をリサイクルした井戸や馬を一頭埋葬した土壙・大量の製塩土器などが出土した蔀屋北遺跡など市内各所で集落が営まれる。特に市内のほとんどの古墳時代の遺跡からは、馬の骨と製塩土器が出土することから、馬飼い集団の存在が考えられ、また中野遺跡・四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡などからは、初期の須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が多く出土することから、渡来系の人々が生活を営んでいたと考えられる。奈良時代の遺跡としては、土器や円面硯とともに土馬が７体・井戸から「…万呂」と墨書された土師器皿などが出土している木間池北方遺跡、「大」と墨書された土師器坏が出土した南野遺跡や四條畷小学校内遺跡などがあげられる。またこの時期には正法寺跡や讃良寺跡で寺院が建立される。特に正法寺跡は薬師寺式の伽藍配置であると推定されており、平成13年度の調査では講堂跡と推定される地点で基壇を検出している。平安時代の遺跡としては、井戸から「高田宅」・「福万宅」と墨書された黒色土器Ａ類碗が出土した岡山南遺跡などがあげられる。なお中世から近世の遺跡についても市内各所で確認している。（第１図）

第２章　調査に至る経過

平成13年５月14日付けで岡嶋 恒一氏より四條畷市教育委員会に四條畷市大字中野３丁目433－１他において共同住宅を建築するにあたって、文化財保護法第57条の２第１項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。開発内容を検討・協議した結果、平成13年12月12日に遺跡の有無及び堆積土の層序を確認するために確認調査を実施したところ、遺物包含層および遺構を確認した。その成果をもとに岡嶋氏と協議を重ねた結果、開発により遺跡が破壊される箇所については原因者負担で発掘調査を実施することとなった。その後、大幅な設計変更が生じたことや当初の届出から１年以上経過したことから、平成14年８月７日に再度、文化財保護法第57条の２第１項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。（第２図）



第2図　位　置　図



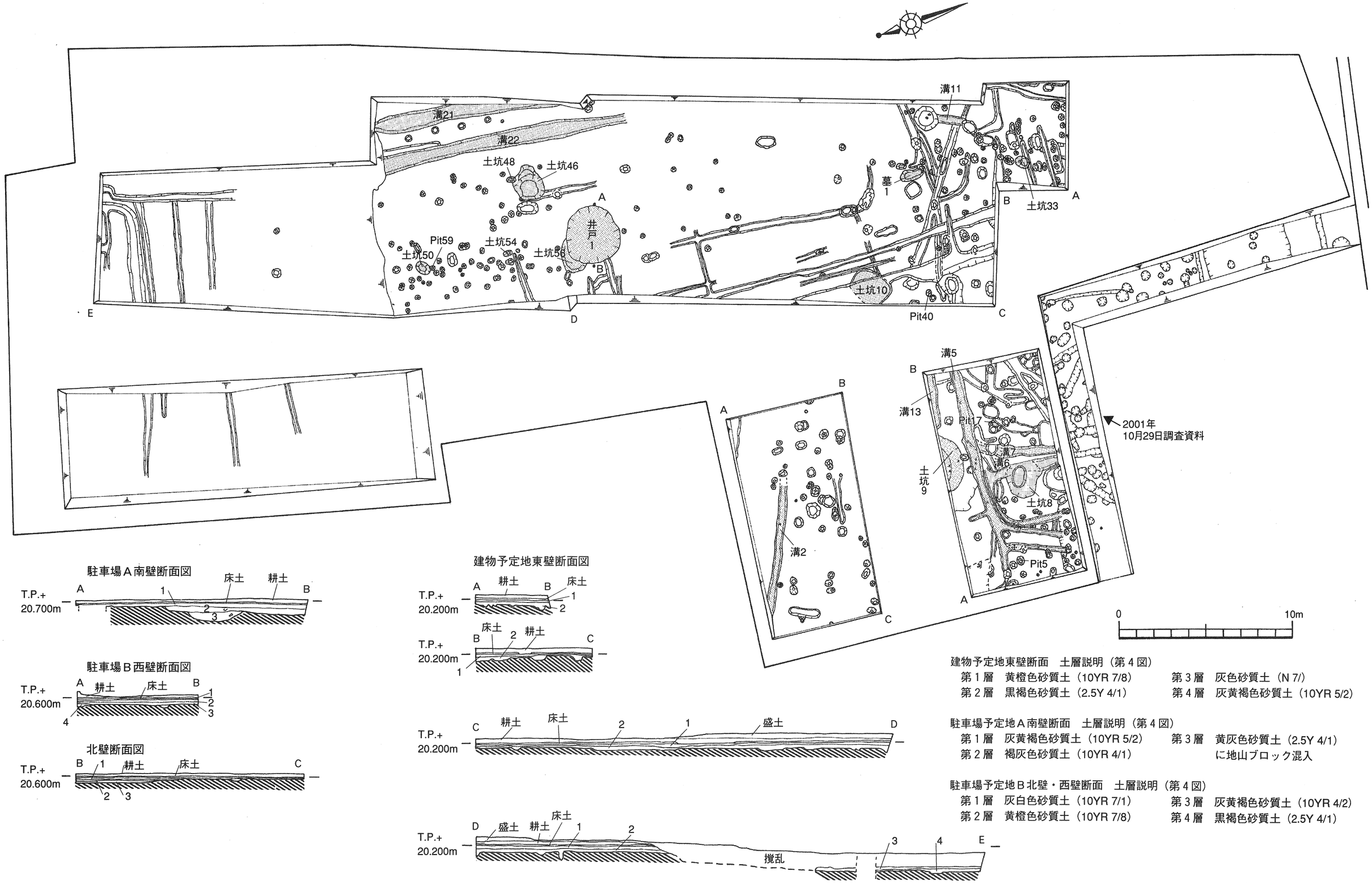
第3図　配　置　図

発掘調査を開始するにあたっては、開発計画図面に示された構造物のうち基礎工事によって遺跡が破壊される建物建設予定地1箇所・駐車場建設予定地3箇所を対象地とした。また発掘調査の範囲を決定するにあたっては、基礎工事の余掘りを考慮に入れて、それぞれの基礎構造物の位置から1m拡張したところを範囲とした。発掘調査の総面積は約1,009㎡である。

発掘調査は平成14年8月19日に準備工を開始し、平成14年10月7日に埋め戻しを完了した。調査の実働日数は32日であった。

発掘調査をすすめるにあたっては前述したとおり、調査地区が建物建設予定地1箇所と駐車場建設予定地3箇所にわかれているため、残土置場を確保する必要上、すべての地区を同時に調査することは不可能であった。そのため、駐車場予定地についてはそれぞれを個別に、建物予定地については反転作業で調査を実施した。

なお次章より調査の成果を述べていくにあたって、今回4箇所の地区にそれぞれ便宜上の呼称をつけた。以下、建物建設予定地については建物予定地、駐車場建設予定地については北側に位置するものから、駐車場A・駐車場B・駐車場Cとする。(第3図)



建物予定地東壁断面　土層説明（第４図）

第１層	黄橙色砂質土（10YR 7/8）	第３層	灰色砂質土（N 7/）
第２層	黒褐色砂質土（2.5Y 4/1）	第４層	灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）

駐車場予定地Ａ南壁断面　土層説明（第４図）

第１層	灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）	第３層	黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）に地山ブロック混入
第２層	褐灰色砂質土（10YR 4/1）		

駐車場予定地Ｂ北壁・西壁断面　土層説明（第４図）

第１層	灰白色砂質土（10YR 7/1）	第３層	灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）
第２層	黄橙色砂質土（10YR 7/8）	第４層	黒褐色砂質土（2.5Y 4/1）

第４図　遺構平面図・壁断面図

第３章　調査の成果

（１）基本層序

第Ⅰ層　盛土　厚さ10～20cm。現在の地盤である。現代の盛土。

第Ⅱ層　耕土　厚さ５～20cmである。現代の耕土。

第Ⅲ層　床土　厚さ４～10cmである。現代の床土。

第Ⅳ層　黄灰色系砂質土　厚さ10～50cmである。遺物包含層である。

第Ⅴ層　黄灰色系粘質土・灰色砂礫層　遺構面であり、地山面である。

（２）遺　　構

今回の調査地区の調査前現況は、東へ向かって一段ずつ高くなる３枚の耕作地と耕作地から一段低くなる居住地に大きく分れていた。それぞれの調査地区からは、以下のような遺構を検出した。一部を除きほとんどの遺構からは小片を含めて遺物が出土しており、それぞれの時期についてもおおよそ以下のとおり確認することができた。

建物予定地

古墳時代：Ｐit23基・溝11本・土坑31基・落ち込み状遺構１基

平安時代：Ｐit11基・溝２本・土坑３基

中世：Ｐit48基・溝10本・土坑21基・墓１基・井戸１基

近世：溝１本

駐車場Ａ

古墳時代：Ｐit41基・溝12本・土坑９基

中世：Ｐit１基・溝３本

駐車場Ｂ

古墳時代：Ｐit16基・溝１本・土坑４基

中世：Ｐit４基・溝２本・土坑１基

以上のように古墳時代から近世までの遺構を検出した。そのうち古墳時代の遺構については、駐車場Ａと駐車場Ｂ・建物予定地の北側に集中しており、中世の遺構については、ほぼ全域においてみられた。また平安時代の遺構については、建物予定地の中央部分に集中してみられた。なお、駐車場Ｃについては４本の溝を検出しているが、遺物が出土しなかったため確実な時期については不明である。しかし建物予定地の南端で検出した溝の続

きと考えられることから、中世の遺構であると思われる。

以下それぞれの地区において、今回図示できた遺物が出土している遺構について概観を述べる。

なおそれぞれの区画は、その南西にあたるＸ・Ｙの座標値をもってその名称とした。

☆建物予定地（第４図・図版１～３）

調査前のこの地区は、南端から約1/3が居住地となっており、耕作地として利用されていた北側約2/3の土地よりは約60cm程低くなっていた。重機により遺物包含層まで掘削を開始したところ、南端から約1/3の土地は、現地表から約80cmがすべて撹乱層（搬入土）であった。地元の方の話によると、この付近は約70年前に当地の南側を東西に流れる清滝川が氾濫し、その後土地のかさあげを行なったとのことであった。このことから断面で約80cm観察できた撹乱層は、その際に搬入した土砂であると思われる。また遺構面の一部はその際に破壊されていたことが、断面の観察により判明した。

重機で地表面より約30～60cmの盛土・耕土・床土を掘削したところで、黄灰色系砂質土の遺物包含層を検出した。この包含層は厚さ約20～40cm程度堆積しており、出土遺物から第１層は近世、第２～３層は中世の遺物包含層であった。遺物包含層を掘り下げたところで遺構面を検出した。この遺構面が、今回の調査地区の地山面でもある。

Ｐit40（第４図・図版２－１）　この遺構は、Ｘ＝-139.940・Ｙ＝-32.440地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.900m前後を測った。平面形態は、ほぼ円形を呈している。規模は、直径約40cm・深さ約13cmであった。

遺物は、須恵器坏蓋（第６図－１・図版５－１）などが出土している。当遺構は、出土遺物から６世紀中頃のものと考えられる。

Ｐit59（第４図・図版３－１）　この遺構は、Ｘ＝-139.970・Ｙ＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.600m前後を測った。平面形態は、ほぼ角丸の正方形を呈しているが、土坑50に削平されている。規模は、一辺約25cm・深さ約21cmであった。

遺物は、土師器小皿（第６図－２・図版５－２）などが出土している。

溝11（第４図・図版２－１）　この遺構は、Ｘ＝-139.940・Ｙ＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.700m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ北東－南西方向におく直線状を呈している。規模は、長さ約1.5m・幅約50cm・深さ約17cmであった。　遺物は、須恵器坏蓋（第６図－３・図版５－３）などが出土している。当遺構は、出土遺物から６世紀中頃のものと考えられる。

溝21（第４図・図版３－１）　この遺構は、Ｘ＝-139.960～-139.970・Ｙ＝-32.460地区

において検出した。検出面の標高はT.P.+19.200～19.400m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ南北方向におく直線状を呈している。規模は、長さ約10.9m・幅約1.1m・深さ約4～12cmであった。

遺物は、須恵質甕（第6図－4・図版5－4）などが出土している。当遺構は、出土遺物から13世紀代のものと考えられる。

溝22（第4図・図版3－1）　この遺構は、X＝-139.960～-139.970・Y＝-32.460地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.300～19.400m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ南北方向におく直線状を呈しており、溝21と平行である。規模は、長さ約14.2m・幅約1.1m・深さ約12～14cmであった。

遺物は、青磁碗（第6図－5・図版5－5）などが出土している。当遺構は、出土遺物から15世紀末頃のものと考えられる。

土坑10（第4図・図版2－1）　この遺構は、X＝-139.950・Y＝-32.440地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.900m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ角丸の正方形を呈している。規模は、一辺が約2m・深さ約14cmであった。

遺物は、須恵器坏身（第6図－6・図版5－6）などが出土している。当遺構は、出土遺物から6世紀中頃のものと考えられる。

土坑33（第4図・図版2－1）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.800m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ楕円形を呈しており、南側が一段深くなるように2段に掘込んでいる。規模は、長径約80cm・短径約60cm・深さ1段目約42cm・2段目約53cmであった。

遺物は、白磁碗（第6図－7・図版5－7）・瓦器皿（第6図－8・図版6－8）などが出土している。当遺構は、出土遺物から12世紀中頃のものと考えられる。

土坑46（第4図・図版3－1）　この遺構は、X＝-139.970・Y＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.500m前後を測った。遺構の平面形態は、角丸方形の一部に半円が繋がったような不整形で、西側が一段深くなるように2段に掘込んでいる。一部、土坑48に削平されている。規模は、長軸約2m・短軸約1.7m・深さ1段目約35cm・2段目約90cmであった。

遺物は、土師器把手（第6図－9・図版5－9）・土師器台付甕（第6図－10・図版5－10）・韓式系土器高坏（第6図－11・図版5－11）などが出土している。当遺構は、出土遺物から5世紀中頃のものと考えられる。

土坑48（第4図・図版3－1）　この遺構は、X＝-139.970・Y＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.500m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ楕円形

を呈しており、土坑46を削平している。規模は、長径約50cm・短径約30cm・深さ約30cmであった。

遺物は、瓦器碗（第６図－12・図版６－12）などが出土している。当遺構は、出土遺物から11世紀末頃のものと考えられる。

土坑50（第４図・図版３－１）　この遺構は、X＝-139.970・Y＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.500m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ楕円形を呈しており、Pit59を削平している。規模は、長径約90cm・短径約60cm・深さ約27cmであった。

遺物は、白磁碗（第６図－13・図版５－13）などが出土している。当遺構は、出土遺物から12世紀代のものと考えられる。

土坑54（第４図・図版３－１）　この遺構は、X＝-139.970・Y＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.600m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ楕円形を呈している。規模は、長径約50cm・短径約25cm・深さ約33cmであった。

遺物は、土師器小皿（第６図－14・図版６－14）などが出土している。

土坑56（第４図・図版３－１）　この遺構は、X＝-139.960・Y＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.700m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ楕円形を呈しているようであるが、井戸１に削平されているため不明である。規模は、長径約２m（復元推定）・短径約1.5m・深さ約42cmであった。

遺物は、土師器小皿（第６図－15・図版６－15）などが出土している。当遺構は、出土遺物から11世紀末頃のものと考えられる。

墓１（第４図・図版２－１）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.450地区において検出した。検出面の標高はT.P.+19.800m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ楕円形を呈している。規模は、長径約1.3m・短径約50cm・深さ約25cmであった。底部には粘土を貼りつけたような痕跡がみられ、木棺のような痕跡はみられなかった。歯の大きさから成人のものと思われる。鉄製刀子は副葬品と考えられる。

遺物は、人骨（奥歯）５本・鉄製刀子（第６図－16・図版５－16）・瓦質土器片などが出土している。当遺構は、他の出土遺物から中世のものと考えられる。

井戸１（第４・５図・巻頭図版・図版３・10）　この遺構は、X＝-139.960・Y＝-32.450地区において検出した石組みの井戸である。検出面の標高は東側肩部でT.P.+19.800、西側肩部でT.P.+19.700m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ円形を呈しており、土坑56を削平している。規模は、直径約3.18m・深さ約2.96mであった。

井戸の掘り方は、地表面から約2.4mまでを逆台形状に掘り込んだ後、曲物を設置する

部分を逆凸状に約0.56m掘っている。曲物は3段積み上げられており、大きさは下段に設置されたものから直径約41cm・高さ約21.5cm・厚さ約5mm（図版10）、直径約45cm・高さ約27cm・厚さ約5mm、直径約50cm・高さ約20cm・厚さ約5mmである。それぞれ桧材の表面に斜格子や垂直に刻み目を入れ、丸く曲げた端を桜の樹皮で止めている。また、下段のものには側面に墨書が施されている。肉眼での判読が困難であったため、奈良文化財研究所で赤外線写真による解読を依頼したところ、以下のような墨書を確認できた。（図版10）

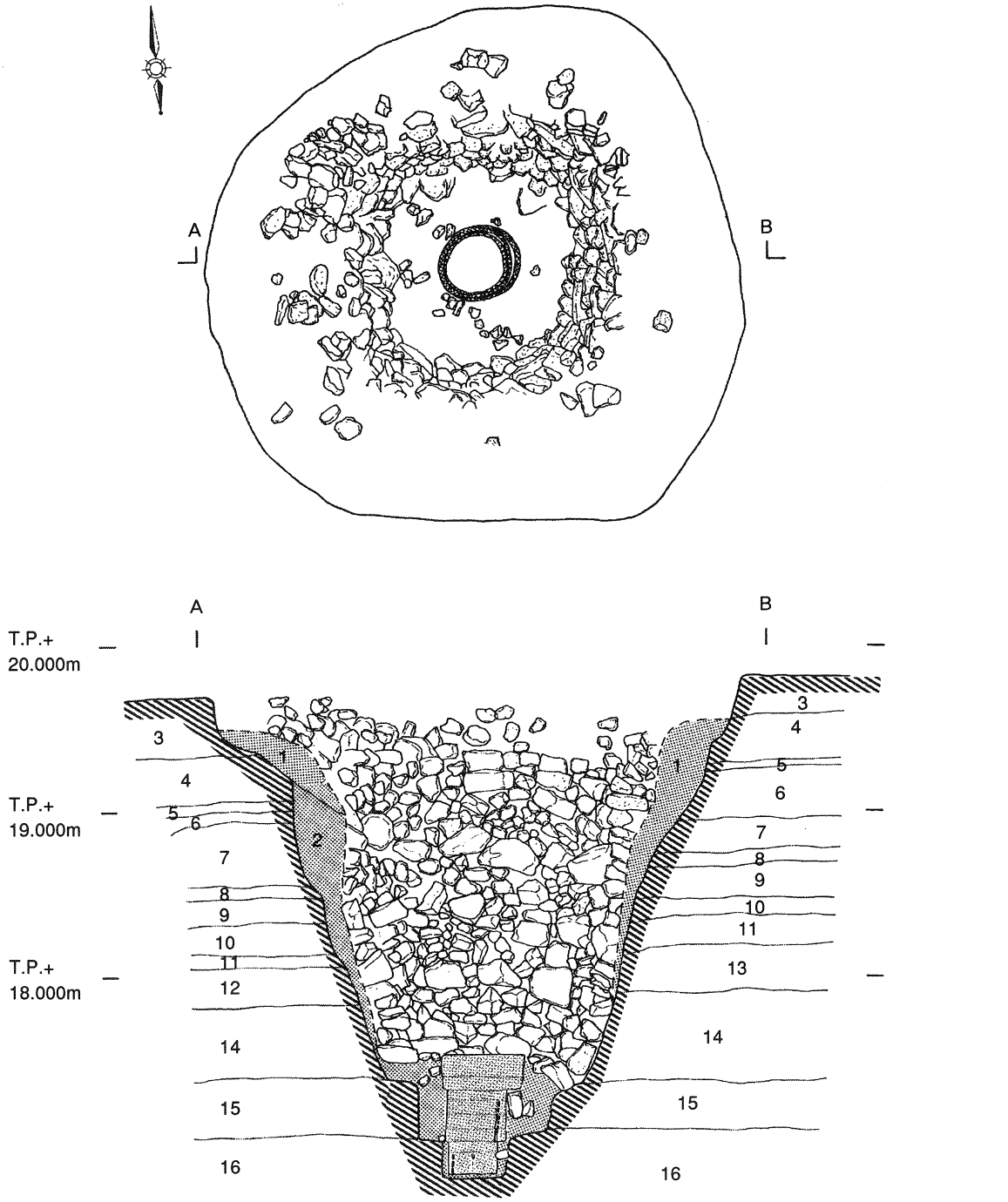
(1)　曲物にたいして縦方向に「阿□□□□□　□□」　(2)　曲物にたいして横方向に［圭ﾏ］「□□」

このように2箇所で墨書を確認することができたが、「阿」の文字以外は不鮮明で文字やその内容を確定することはできなかった。今後、引き続きこのような表記の例について調べていくことを課題としたい。

曲物に関しては蒸し器などを再利用している場合が多く、この場合曲物の下端に小さな孔が巡っている。今回出土した曲物に関しても、上段と中段の2点に関してはそれらを確認したが、下段のものについては孔があけられていなかった。そのことから当初、下段のものは曲物専用に作られたものであると考えていた。しかし、墨書の赤外線写真から(1)の末の文字が欠けている可能性が大きいと判断されたため、この曲物は完全な形のものではなく（本来は蒸し器であったか）下の部分を欠いて井戸に使用したものであると考えられる。

石の組み方については、石材は花崗岩の自然石を利用しており、3段に積み上げた曲物の最上部から組まれている。この組み方には特徴があり、まず20～40cm大の若干細長い形のものを基礎に敷き並べ、次に裏込めの土を入れながら10～20cm大の様々な形のものを約30cmの高さまで積み上げた後、再度20～40cm大の若干細長い形のものを1段積んでいる。このような組み方を4回繰り返し、上部まで積み上げている。このようにして石を組み上げると、最上部は20～40cm大の若干細長い形のもので組み終わることになると考えられるが、今回の調査ではそれらは抜き取られていたため確認できなかった。

遺物は、上層出土：瓦器碗（第6図－17・図版6－17）・白磁碗（第6図－18·19・図版6－18·19）・土師質羽釜（第6図－20・図版6－20）、下層出土：土師器小皿（第6図－21・図版6－21）・瓦器碗（第6図－22・図版6－22）・土師質羽釜（第6図－23・図版6－23）・須恵質練り鉢（第6図－24・図版6－24）・砥石（第6図－25・図版6－25）、裏込め出土：瓦器碗（第6図－26・図版6－26）などが出土している。当遺構は、出土遺物から12世紀後半～13世紀初頭頃のものと考えられる。



井戸内　上層：灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）
中層：暗青灰色粘質土（5B 4/1）
下層：中層に灰色粗砂（N 6/）混入

第１層：灰褐色砂質土（7.5YR 5/2）
第２層：１層が還元されている
第３層：にぶい黄橙色砂質土（10YR 6/4）
第４層：黄橙色粘土（10YR 7/8）
第５層：灰色粘土（N 5/）
第６層：灰色粗砂（5Y 6/1）
第７層：黄橙色粗砂（10YR 7/8）
第８層：淡黄色粘土（2.5Y 8/4）
第９層：灰オリーブ色粗砂（5Y 6/2）
第10層：明褐灰色粗砂（5YR 7/1）
第11層：淡黄色粘土（5Y 8/4）
第12層：青灰色粘土（10BG 6/1）
第13層：オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）
第14層：灰色粗砂（5Y 6/1）
第15層：オリーブ黒色シルト（5Y 3/1）
と灰白色シルト（5Y4/1）が層状に堆積
第16層：緑灰色シルト（10GY 5/1）

第５図　井戸１　平面図・立面図

☆駐車場A（第4図・図版4－1）

調査前のこの地区は、耕作地として利用されていた。この耕作地は建物予定地よりは1段高くなっている。調査にあたっては、北側に隣接する四條畷市立保健センターの駐車場建設に伴う擁壁部分の発掘調査を2001年10月に行なったところ多くの遺構を検出したことから、それらの続きがこの調査地区において検出されることは予測できた。

重機で地表面より約25cmの耕土・床土を掘削したところで、灰褐色系砂質土の遺物包含層を検出した。この包含層は厚さ約20～60cm程度堆積しており、出土遺物から中世の遺物包含層であった。遺物包含層を掘り下げたところで遺構面を検出した。この遺構面が、今回の調査地区の地山面でもある。

Pit5（第4図・図版4－1）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.420地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.400m前後を測った。平面形態は、ほぼ円形を呈している。規模は、直径約50cm・深さ約33cmであった。

遺物は、韓式系土器壷（第7図－27・図版9－27）などが出土している。

Pit17（第4図・図版4－1）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.430地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.200m前後を測った。他の遺構によって削平されているため平面形態は、ほぼ方形を呈していると思われる。規模は、一辺約40cm（推定復元）・深さ約12cmであった。

遺物は、須恵器甕（第7図－28・図版7－28）などが出土している。当遺構は、出土遺物から6世紀末頃のものと考えられる。

溝5（第4図・図版4－1）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.420～-32.430地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.000～20.400m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ東西方向におく直線状を呈しているが、東側において3本に枝分かれしている。溝6・7を削平している。規模は、長さ約12.8m・幅約40～80cm・深さ約18cmであった。

遺物は、土師器ミニチュア土器（第7図－29・図版7－29）・須恵器坏蓋（第7図－30・図版7－30）・須恵器坏身（第7図－31・図版7－31）などが出土している。当遺構は、出土遺物から6世紀中頃のものと考えられる。

溝6（第4図・図版4－1）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.430地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.300m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ南北方向におく直線状から溝5に沿ってU字状にカーブしている。土坑8を削平しており、溝5に削平されている。規模は、長さ約8m・幅約20～70cm・深さ約17cmであった。

遺物は、須恵器坏身（第7図－32・図版7－32）などが出土している。当遺構は、出土遺物から6世紀末頃のものと考えられる。

溝７（第４図・図版４－１）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.430地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.300m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ南北方向におく直線状を呈しており、溝５に削平されている。規模は、長さ約4.5m・幅約50～80cm・深さ約27～30cmであった。

遺物は、須恵器坏身（第７図－33・図版７－33）・韓式系土器甕（第７図－34・図版７－34）・砥石（第７図－35・図版７－35）などが出土している。当遺構は、出土遺物から６世紀中頃のものと考えられる。

溝13（第４図・図版４－１）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.420～-32.430地区において検出したが、ほとんどの部分が調査地区外である。検出面の標高はT.P.+20.000m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ東西におく直線状を呈している。規模は、長さ約3.1m・深さ約40cmであった。

遺物は、須恵器有蓋高坏身（第７図－36・図版７－36）などが出土している。当遺構は、出土遺物から５世紀末頃のものと考えられる。

土坑８（第４図・図版４－１）　この遺構は、X＝-139.940・Y＝-32.430地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.300m前後を測った。遺構の平面形態は、ほぼ楕円形を呈しており、溝６に削平されている。規模は、長径約2.1m・短径約1.8m・深さ約１mであった。遺構の埋土は２層に分かれており、上層には焼土が含まれていた。またこの遺構は、地山粘土層を掘込んで最下層が砂層に達しているため、比較的多い量の湧水がみられた。このことから、素掘りの井戸であった可能性が考えられる。

遺物は、須恵器有蓋高坏蓋（第７図－37・図版７－37）・須恵器坏蓋（第７図－38･39・図版７－38･39）・須恵器坏身（第７図－40・図版７－40）・土師器碗（第７図－41・図版８－41）・土師器小型甕（第７図－42・図版８－42）・土師器甑（第７図－43・図版８－43）・製塩土器（第８図－50～53・図版９－50～53）・滑石製臼玉（第８図－54～64・図版９－54～64）・滑石製管玉（第８図－65･66・図版９－65･66）などが出土している。当遺構は、出土遺物から６世紀中頃のものと考えられる。

土坑９（第４図・図版４－１）　この遺構は、X＝-139.940～-139.950・Y＝-32.430地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.000m前後を測った。遺構の平面形態は、遺構のほとんどが調査地区外にあるため詳細は不明であるが、ほぼ円形を呈しているものと思われる。規模は、直径約3.2m・深さ約55cmであった。

遺物は、土師器ミニチュア土器（第７図－44・図版８－44）・須恵器坏身（第７図－45・図版８－45）・須恵器器台（第７図－46・図版９－46）・韓式土器（第７図－47・図版９－47）・須恵器甕（第７図－48・図版９－48）などが出土している。当遺構は、出土

遺物から6世紀後半頃のものと考えられる。

☆駐車場B（第4図・図版4－2）

調査前のこの地区は、耕作地として利用されていた。この耕作地は駐車場Aと同じく建物予定地よりは1段高くなっている。

重機で地表面より約20～30cmの耕土・床土を掘削したところで、灰黄色系砂質土の遺物包含層を検出した。この包含層は厚さ約10～40cm程度堆積しており、出土遺物から中世の遺物包含層であった。遺物包含層を掘り下げたところで遺構面を検出した。この遺構面が、今回の調査地区の地山面でもある。

溝2（第4図・図版4－2）　この遺構は、X＝-139.950～-139.960・Y＝-32.420～-32.430地区において検出した。検出面の標高はT.P.+20.300～20.500m前後を測った。平面形態は、主軸をほぼ南東－北西方向におく直線状を呈している。規模は、長さ約7.6m・幅約40～50cm・深さ約10cmであった。

遺物は、須恵器坏蓋（第7図－49・図版9－49）などが出土している。当遺構は、出土遺物から6世紀前半頃のものと考えられる。

☆駐車場C（第4図）

調査前のこの地区は居住地となっていた。この地区と北側の耕作地では約60cm程の高低差があり、一段高い耕作地との境目の段がこの地区の北端にあたる。重機により掘削を開始したところ、現地表から約1～1.5mがすべて撹乱層（搬入土）であった。これらは建物予定地のところでも述べたように、すべて搬入した土砂であると思われる。また4本の溝を検出しているが、遺物が出土しなかったため確実な時期については不明である。しかし建物予定地の南端で検出した溝の続きと考えられることから、中世の遺構であると思われる。

以上、各調査地区における主な遺構の概観について述べた。今回の発掘調査では、前述したように古墳時代から近世までの遺構を検出した。そのうち古墳時代については、古墳時代後期を中心として中期末頃から後期にかけての遺構が駐車場Aと駐車場B・建物予定地の北側に集中しており、またそれらがさらに北側へ拡がることも2001年の調査により判明している。特に駐車場Bでは掘立柱建物跡と想定できる柱列が2棟みられ、駐車場Aの井戸と考えられる遺構も考え合わせると、この時期の集落であったと考える。平安時代の遺構については、建物予定地の中央部分に集中してみられたが少数であったため建物跡の復元などには至らなかった。中世については、鎌倉時代の遺構が駐車場Bと建物予定地全

体においてみられた。建物予定地では掘立柱建物跡と想定できる柱列が１棟みられ、石組み井戸の存在からも鎌倉時代の集落跡であったと考える。特に石組み井戸については、ほぼ完全な形で検出でき、石の積み上げ方についても詳細を観察することができた。また曲物については下段のものに、市内出土のものでは市役所東別館建設に伴う発掘調査で出土したものについで２例目となる墨書がみられた。(図版10)

このように当地域では、古墳時代後期から平安時代・鎌倉時代と集落が営まれていたことが今回の発掘調査で判明した。

（３）遺　　物

建物予定地出土遺物（第６図－１～26・図版５・６－１～26）

１は須恵器坏蓋である。若干丸味をもつ天井部から、内湾しながら直下に下り口縁部に至る。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ調整を施している。口縁端部内面には、内傾する段を有している。天井端部に沈線を一条巡らし稜線を表現している。６世紀中頃の時期に該当するものと考える。Ｐit40から出土。（第６図－１・図版５－１）

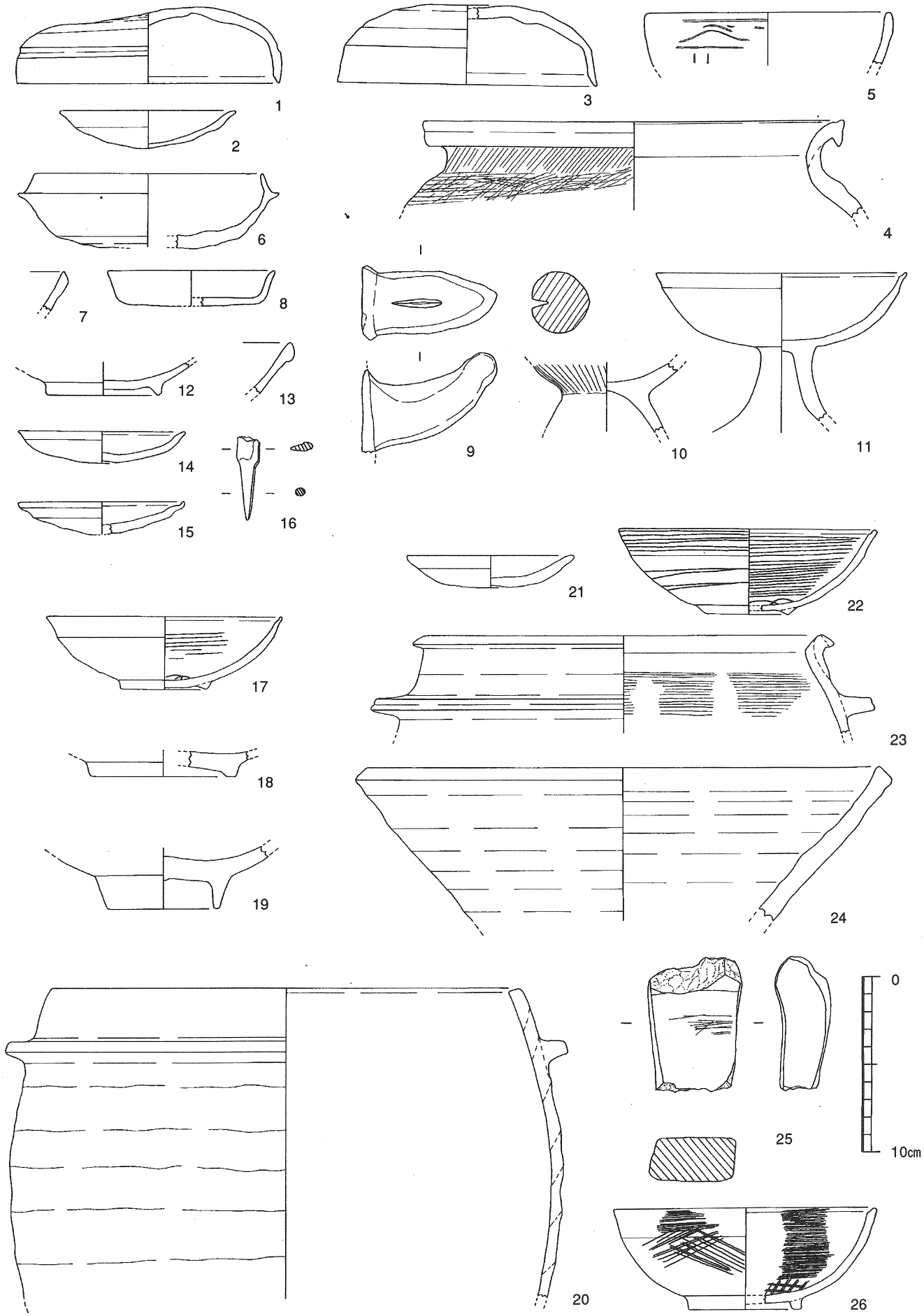
２は土師器小皿である。若干丸味をもつ底部から外上方へのび、口縁端部に至る。体部外面には一部に指頭痕がみられ、内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。Ｐit59から出土。（第６図－２・図版５－２）

３は須恵器坏蓋である。平坦気味な天井部から、内湾しながらやや外下方へ開き気味に口縁部に至る。体部外面は天井部から1/2程度回転ヘラケズリ調整を施している。口縁端部内面には、内傾する段を有している。体部と口縁部の間の稜線はない。６世紀中頃の時期に該当するものと考える。溝11から出土。（第６図－３・図版５－３）

４は須恵質甕の小片である。口縁部は短く外反し、口縁端部は外側下方に折り返すことにより断面三角形にしている。体部外面は平行叩き調整を施している。東播磨系の製品である。13世紀代の時期に該当するものと考える。溝21から出土。（第６図－４・図版５－４）

５は青磁碗の小片である。口縁部に雷文帯がみられるが、文様は退化している。龍泉窯系の製品である。15世紀末頃の時期に該当するものと考える。溝22から出土。（第６図－５・図版５－５）

６は須恵器坏身である。平底気味の底部から内湾しながら受け部に至り、端部は丸く納めている。口縁の立ち上がりは比較的短く内傾し、端部は丸く納めている。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ調整を施している。６世紀中頃の時期に該当するものと考える。土坑10から出土。（第６図－６・図版５－６）



第６図　出土遺物１（建物予定地）

7は白磁碗の小片である。口縁端部は玉縁状を呈する。12世紀代の時期に該当するものと考える。土坑33から出土。（第6図－7・図版5－7）

8は瓦器皿である。平底の底部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部が若干外反している。内面には幅が1㎜程度のジグザグ状暗文がわずかに確認できる。炭素の吸着状態が不良である。12世紀中頃の時期に該当するものと考える。土坑33から出土。（第6図－8・図版6－8）

9は土師器把手である。幅は根元から先端に向かって狭くなり、先端は尖り気味である。側面からみると、斜め上方に向かって反っている。断面形態は円形で、上部に切り込みがあり、先端部の裏側には作製時の支えのための浅い穴が2箇所みられる。土坑46から出土。（第6図－9・図版5－9）

10は台付甕の脚部である。甕の底部外面には幅3㎜程度のハケメ調整が施されている。東海地方以東からの搬入品であると思われる。底部内面には炭化物が付着している。土坑46から出土。（第6図－10・図版5－10）

11は韓式系土器高坏である。坏部は外上方へ開き気味に口縁部に至る。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反し、端部内面には内傾する明瞭な段がみられる。硬質に焼成されている。5世紀中頃の時期に該当するものと考える。土坑46から出土。（第6図－11・図版5－11）

12は瓦器碗の高台である。見込みには、幅1㎜程度のジグザグ状暗文が密に施されている。これは体部内面の圏線ミガキより先に施されたものである。高台は断面台形を呈している。大和型瓦器碗のⅠ－Cに分類されているもので、11世紀末頃の時期に該当するものと考える。土坑48から出土。（第6図－12・図版6－12）

13は白磁碗の小片である。口縁端部は玉縁状を呈する。12世紀代の時期に該当するものと考える。土坑50から出土。（第6図－13・図版5－13）

14は土師器小皿である。平底気味の底部から体部が外上方へのび、口縁部はヨコナデ調整により若干外反する。底部外面には一部に指頭痕がみられる。内面全体に煤の付着がみられることから、灯明皿であると考える。土坑54から出土。（第6図－14・図版6－14）

15は土師器小皿である。平底気味の底部から体部が外上方へのびる。口縁端部は内側に丸め気味で、いわゆる「て」の字状口縁を呈している。11世紀末頃の時期に該当するものと考える。土坑56から出土。（第6図－15・図版6－15）

16は鉄製刀子である。刀子の茎部分である。墓1から出土。（第6図－16・図版5－16）

17は瓦器碗である。体部は底部から外上方へのび口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整によってわずかに外反する。器壁の状態が悪いため、体部内外面のヘラミガキ調整は、内

面の一部に確認できるだけで不明瞭である。見込みには、連結輪状の暗文がわずかに確認できる。高台は断面三角形を呈している。大和型瓦器碗のⅢ－Aに分類されているもので、12世紀後半頃の時期に該当するものと考える。井戸１上層から出土。（第６図－17・図版６－17）

18は白磁碗の高台部である。色調は灰白色を呈している。井戸１上層から出土。（第６図－18・図版６－18）

19は白磁碗の高台部である。色調は淡黄色を呈している。井戸１上層から出土。（第６図－19・図版６－19）

20は土師質羽釜である。体部は下半部から丸味を持ちながら口縁部に至る。口縁部は短く、端部は若干内傾している。鍔は短く、若干上方へ傾いている。体部外面には粘土紐の痕跡がみられ、内面は丁寧なナデ調整が施されている。鍔の裏側から体部外面にかけて煤の付着がみられる。井戸１上層から出土。（第６図－20・図版６－20）

21は土師器小皿である。平底の底部から体部が外上方へのび、口縁部はヨコナデ調整により若干外反する。底部外面には一部に指頭痕がみられる。井戸１下層から出土。（第６図－21・図版６－21）

22は瓦器碗である。体部は底部から外上方へのび口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整によってわずかに外反する。体部外面の中位から口縁部付近には粗いヘラミガキ調整を施し、内面には幅が２㎜程度の圏線ミガキを若干密に施している。見込みには、連結輪状の暗文を施している。高台は断面三角形を呈している。大和型瓦器碗のⅢ－Aに分類されているもので、12世紀後半頃の時期に該当するものと考える。井戸１下層から出土。（第６図－22・図版６－22）

23は土師質羽釜である。体部は丸味を持ちながら口縁部に至るものと思われる。口縁部は「く」の字に短く屈曲し、端部は斜め下方へ短く折り返している。鍔は短く、水平に付いている。口縁部内面にはヨコハケメ調整が施されている。鍔の裏側から体部外面にかけて煤の付着がみられる。井戸１下層から出土。（第６図－23・図版６－23）

24は須恵質練り鉢である。体部はほぼ直線的に大きく外上方に開き、口縁端部を若干つまみ上げている。東播磨系の製品である。13世紀初頭頃の時期に該当するものと考える。井戸１下層から出土。（第６図－24・図版６－24）

25は砥石である。４面とも使用した痕跡がみられる。井戸１下層から出土。（第６図－25・図版６－25）

26は瓦器碗である。体部は底部から丸味を持ちながら口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整によってわずかに外反する。体部外面の中位から口縁部付近には若干密なヘラミガキ

調整を施し、内面には幅が1㎜程度の圏線ミガキを密に施している。見込みには、ほとんど隙間なくジグザグ状を交差させて斜格子状に暗文を施している。これは体部内面の圏線ミガキより先に施されたものである。高台は断面台形を呈している。大和型瓦器碗のⅠ－Dに分類されているもので、12世紀前半頃の時期に該当するものと考える。井戸1裏込め土内から出土。(第6図－26・図版6－26)

駐車場A出土遺物(第7・8図－27～48･50～66・図版7～9－27～48･50～66)

27は韓式系土器壷の小片である。体部外面は縄蓆文の叩き調整を施したあと、幅約1㎜程度の沈線を入れている。Pit5から出土。(第7図－27・図版9－27)

28は須恵器瑳である。体部は球形を呈し、体部中央には連続した刺突文からなる文様帯を施している。肩部と体部内面には、暗オリーブ灰色の自然釉がみられる。6世紀末頃の時期に該当するものと考える。Pit17から出土。(第7図－28・図版7－28)

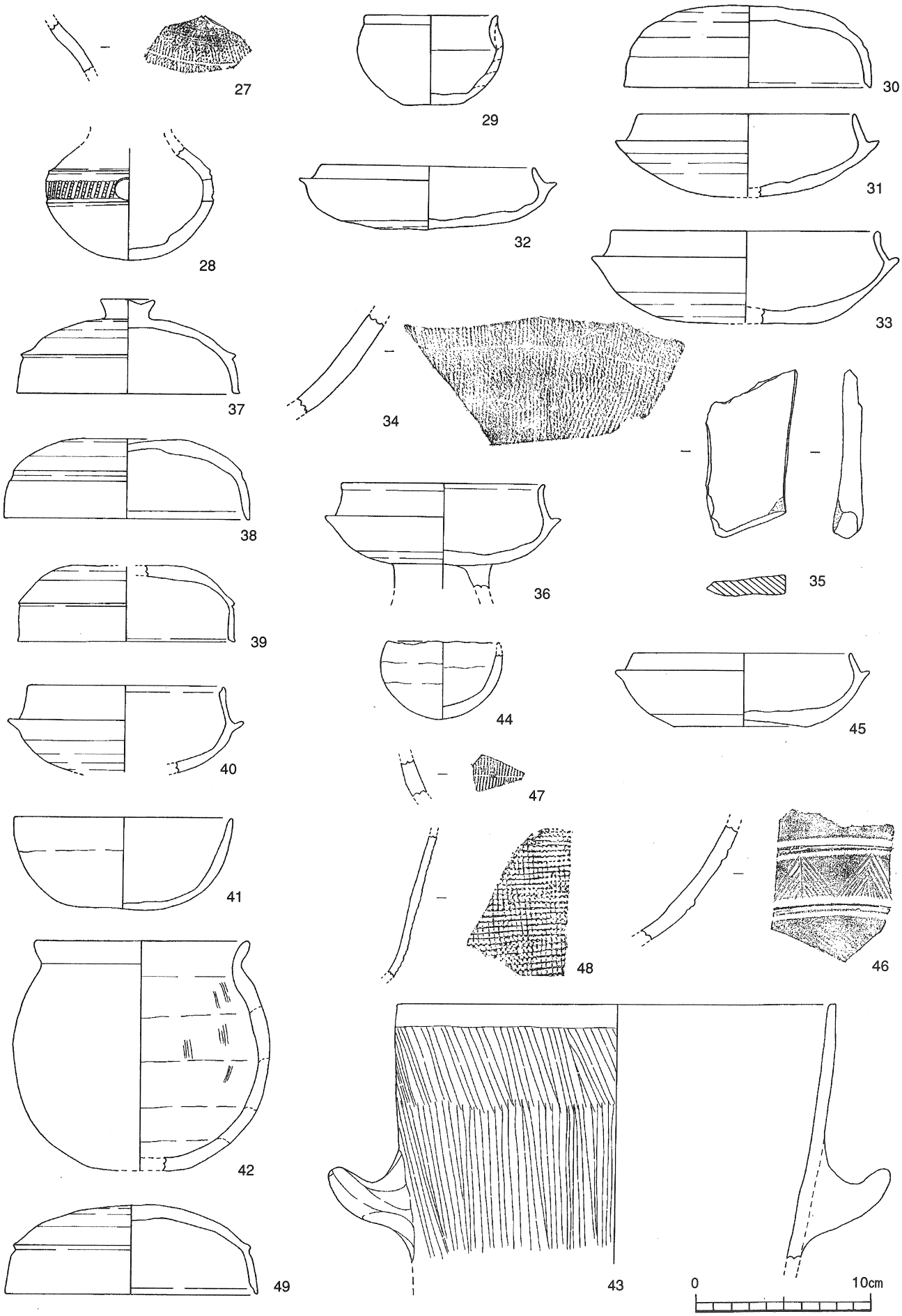
29は土師器ミニチュア土器である。平底から内湾しながら口縁部に至る。口縁部は粘土を内側に大きく折り返している。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反している。
体部内外面ともナデ調整が施されている。溝5から出土。(第7図－29・図版7－29)

30は須恵器坏蓋である。若干丸味をもつ天井部から、内湾しながら若干外下方へ開き気味に口縁部に至る。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ調整を施している。口縁端部内面には、内傾する段を有している。天井端部に沈線を一条巡らし稜線を表現している。6世紀中頃の時期に該当するものと考える。溝5から出土。(第7図－30・図版7－30)

31は須恵器坏身である。丸底気味の底部から内湾しながら受け部に至り、端部は丸く納めている。口縁の立ち上がりは比較的短く内傾し、端部は丸く納めている。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ調整を施している。底部外面には降灰がみられる。6世紀中頃の時期に該当するものと考える。溝5から出土。(第7図－31・図版7－31)

32は須恵器坏身である。平底気味の底部から内湾しながら受け部に至り、端部は丸く納めている。口縁の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く納めている。全体的に扁平である。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ調整を施している。6世紀末頃の時期に該当するものと考える。溝6から出土。(第7図－32・図版7－32)

33は須恵器坏身である。平底の底部から内湾しながら受け部に至り、端部は丸く納めている。口縁の立ち上がりは比較的短く内傾し、端部は丸く納めている。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ調整を施している。6世紀中頃の時期に該当するものと考える。溝7から出土。(第7図－33・図版7－33)



第７図　出土遺物２（駐車場予定地）

34は韓式系土器甕の小片である。体部外面は縄蓆文の叩き調整を施したあと、幅約３㎜程度の沈線を入れている。軟質な焼成である。溝７から出土。（第７図－34・図版７－34）

35は砥石である。３面に使用した痕跡がみられる。溝７から出土。（第７図－35・図版７－35）

36は須恵器有蓋高坏身である。体部は内湾しながら受け部に至り、端部は尖り気味である。口縁の立ち上がりは比較的高く若干内傾し、端部は内傾する段を有する。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ調整を施している。脚部は欠損しているが、残存部から長方形のスカシであったことがわかる。５世紀末頃の時期に該当するものと考える。溝13から出土。（第７図－36・図版７－36）

37は須恵器有蓋高坏蓋である。つまみが付く丸味をもった天井部から、内湾しながら直下に下り口縁部に至る。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ調整後回転カキ目調整を施している。口縁端部は、わずかに凹面をなしているが段は有していない。天井端部には、比較的短い稜がみられる。５世紀末頃の時期に該当するものと考える。土坑８から出土。（第７図－37・図版７－37）

38は須恵器坏蓋である。平坦気味な天井部から、内湾しながらほぼ直下に下り口縁部に至る。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ調整を施している。口縁端部内面には、内傾する段を有している。天井端部に沈線を一条巡らし稜線を表現している。６世紀中頃の時期に該当するものと考える。土坑８から出土。（第７図－38・図版７－38）

39は須恵器坏蓋である。平坦気味な天井部から、内湾しながら直下に下り口縁部に至る。体部外面は天井部から1/2程度回転ヘラケズリ調整後一部回転カキ目調整を施している。口縁端部は、内傾する段を有している。天井端部には、短い稜がみられる。５世紀末頃の時期に該当するものと考える。土坑８から出土。（第７図－39・図版７－39）

40は須恵器坏身である。体部は内湾しながら受け部に至り、端部は尖り気味で若干上外方を向いている。口縁の立ち上がりは比較的高く若干内傾し、端部は内傾する段を有する。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ調整を施している。５世紀末頃の時期に該当するものと考える。土坑８から出土。（第７図－40・図版７－40）

41は土師器碗である。平底の底部から、内湾しながらわずかに外上方へのび、口縁部へ至る。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。土坑８から出土。（第７図－41・図版８－41）

42は土師器小型甕である。丸底から内湾しながら外反する口縁部へ至る。口縁部は短く、端部は丸く納める。体部内外面は丁寧なナデ調整を施しているが、一部にハケメ調整痕がみられる。土坑８から出土。（第７図－42・図版８－42）

43は土師器甑である。体部外面は幅約５㎜の縦ハケメ調整・内面はナデ調整が施されている。把手は根元の幅が約５㎝で先端に向かって狭くなり、側面からみると斜め上方に向かって反っている。断面形態は楕円形で上部が凹んでいる。接合はできなかったが、円孔のあいた底部が伴出している。土坑８から出土。（第７図－43・図版８－43）

44は土師器ミニチュア土器である。底部は尖り気味で、内湾しながら口縁部に至る。体部内外面ともナデ調整が施されているが、一部に粘土紐の痕跡がみられる。土坑９から出土。（第７図－44・図版８－44）

45は須恵器坏身である。平底の底部から内湾しながら受け部に至り、端部は丸く納めている。口縁の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く納めている。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ調整を施している。６世紀後半頃の時期に該当するものと考える。土坑９から出土。（第７図－45・図版８－45）

46は須恵器器台の小片である。体部外面には２本の凸線の間に、内部を線刻で充填した鋸歯文が施されている。若干軟質な焼成である。土坑９から出土。（第７図－46・図版９－46）

47は韓式土器の小片である。体部外面には、幅約２㎜程度の縦方向の平行叩き調整を施したあと、幅約１㎜程度の沈線を入れている。土坑９から出土。（第７図－47・図版９－47）

48は須恵器甕の小片である。体部外面には、一辺約２㎜の正方形の叩き調整を施している。土坑９から出土。（第７図－48・図版９－48）

50～53は製塩土器である。今回出土した製塩土器は、すべて丸底Ⅰ式に分類されているものであり、体部外面に施されている調整によって３タイプに分けられる。器壁の厚さはすべて約２～３㎜である。土坑８から出土。

タイプ１：平行叩きの幅が約３㎜のもの。（第８図－50･51・図版９－50･51）

タイプ２：平行叩きの幅が約６㎜のもの。（第８図－52・図版９－52）

タイプ３：ナデ調整を施しているもの。（第８図－53・図版９－53）

この遺構から出土した製塩土器は、全部で約850ｇであった。

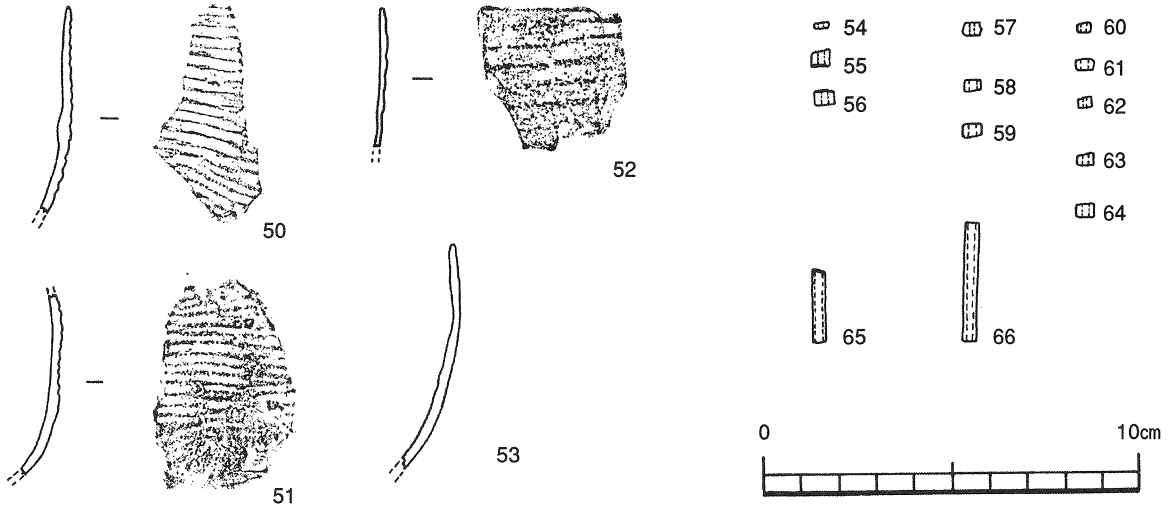
54～64は滑石製臼玉である。ほとんど同じ大きさであるが、54は特に小さく直径約３㎜・厚さ約１㎜であった。土坑８から出土。（第８図－54～64・図版９－54～64）

65・66は滑石製管玉である。65の厚みは約0.5～１㎜と特に薄いものである。他に破片が１点出土している。土坑８から出土。（第８図－65･66・図版９－65･66）

駐車場Ｂ出土遺物（第７図―49・図版９―49）

49は須恵器坏蓋である。丸味をもった天井部から、内湾しながら外下方へ若干開き気味

に口縁部に至る。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ調整を施している。口縁端部は、内傾する段を有している。天井端部には、短い稜がみられる。天井部には降灰がみられる。6世紀前半頃の時期に該当するものと考える。溝2から出土。（第7図－49・図版9－49）



第8図　出土遺物3（駐車場予定地）

第4章　ま　と　め

今回は、四條畷市大字中野３丁目433－１他における共同住宅建設に伴う発掘調査を原因者負担により実施した。今回の調査を実施するにあたっては、隣接地において行なった昭和51年から昭和53年の国鉄片町線複線化工事に伴う発掘調査で、古墳時代中期の落ち込み状遺構・Ｐit群・石敷製塩炉を検出し、また昭和54年度の市民総合センター建設に伴う発掘調査においては、古墳時代中期の人形や馬形の土製品やミニチュア土器と伴に７頭分以上の馬を埋葬した祭祀遺構を検出しているなど、周辺地域において古墳時代中期から後期の集落跡が数多く確認されていることから、当地域にも集落跡が拡がっていることが十分に予測されるものであった。

以下、簡単に整理し、まとめにかえておきたい。

今回の調査においては、本文中でも述べたように過去に破壊を受けていた南側を除き、調査地区全域において遺構を確認した。各遺構を時代ごとに検証すると、古墳時代については、古墳時代後期を中心として中期末頃から後期にかけての遺構が調査区域の北側に集中しており、平安時代については、調査区域の中央部分に集中してみられた。また中世については、鎌倉時代の遺構が大半で、調査区域全体において確認した。各時代とも井戸や柱穴など居住地に関連する遺構が多くみられたことから、古代から集落として繁栄していたことが判明した。

古墳時代の四條畷では、渡来系の人々によって馬が飼育されていた。それらの人々の集落は市役所を中心とする中野遺跡や南野米崎遺跡、耕作地（水田跡）は市民総合体育館がある鎌田遺跡、祭祀場所は市民総合センターを中心とする奈良井遺跡や給食センターがある鎌田遺跡、墓地は清滝古墳群であったと考えている。今回の調査でも馬歯や製塩土器・韓式系土器・韓式土器などそれらに関係する遺物や遺構を検出していることから、市役所を中心とする馬飼い集団の集落がこの辺りにも拡がっていたことが判明した。

鎌倉時代の集落跡は四條畷市内全域で確認できる。今回検出した遺構のうち特に石組みの井戸については保存状態の良いもので、石の積み上げ方についても詳細を観察することができた。今回の調査地域の周辺では、これまでに国道163号とＪＲ学研都市線が交差する南西側の場所において、底部に桶を１段設置している石組みの井戸を１基検出し、また市役所東別館の場所において、それぞれ底部に１段の曲物を設置している方形隅柱縦板型のものを２基検出している。それぞれ井戸本体の構造は違っているが、井戸の底の部分には桶や曲物を設置していることがわかった。特に今回検出した３段積みの曲物については、下段のものに市内出土のものでは２例目となる墨書がみられた。１例目は、市役所東別館

建設に伴う発掘調査で検出した北側の方形隅柱縦板型の井戸から出土したもので、その曲物には、『應保二年　如月廿日』と墨書されていた。應保二年は西暦1162年にあたる。今回のものは、桧材を用いた直径約41cm・高さ約21.5cm・厚さ約５mmのもので、その側面の２箇所に墨書を施していた。奈良文化財研究所で赤外線写真による解読を試みたが、本文中でも述べたように、「阿」の文字以外は不鮮明で墨書の内容を確定することはできなかった。今後このような表記の例については引き続き調べていくことを課題としたい。（図版10）

以上のように今回の発掘調査では、それぞれの時代の遺跡の性格やその拡がり、また集落内の様々な遺構の構造などについて貴重な資料を得ることができた。今後さらに四條畷市内を含め北河内の各時代を考えていく上で、これらの調査結果を活用していくことを今後の課題としたい。

図　　版

1．調査前全景（北から）

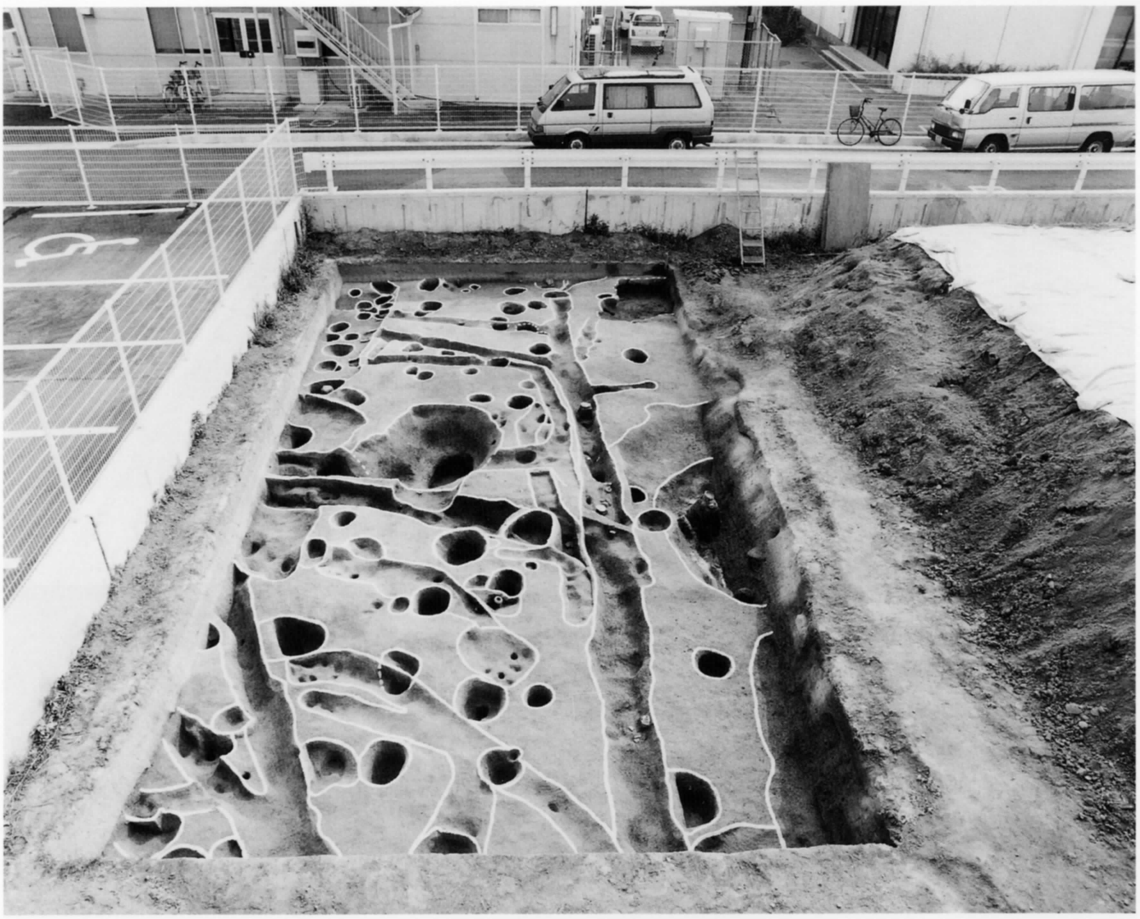
2．作　業　状　況

1．建物予定地北側遺構全景（北端から）

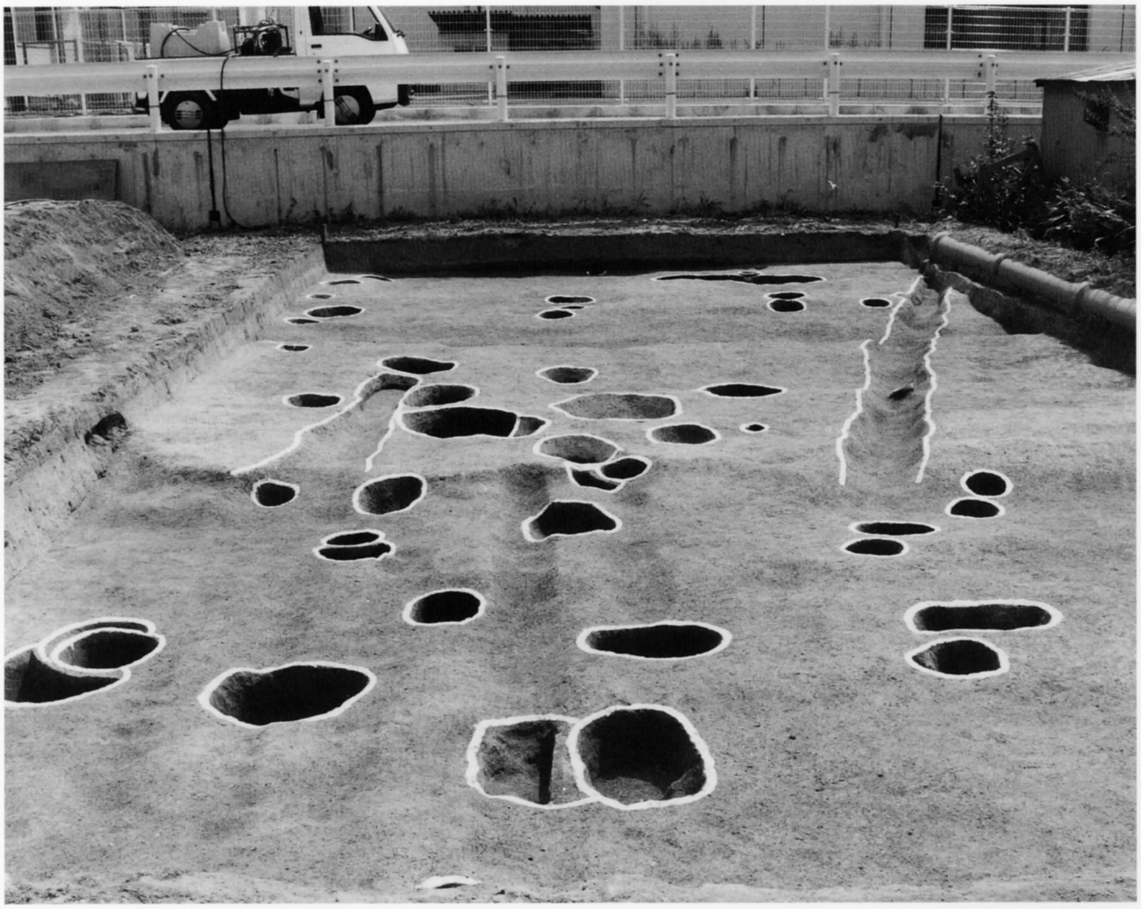
2．建物予定地中央遺構全景（東から）

1．建物予定地中央遺構全景（北から）

2．井戸１全景（南から）

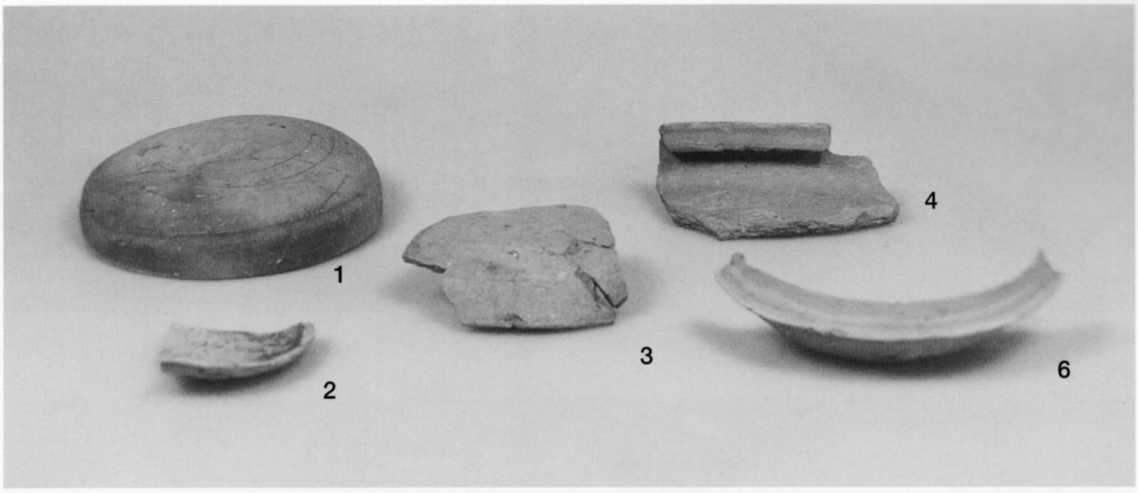


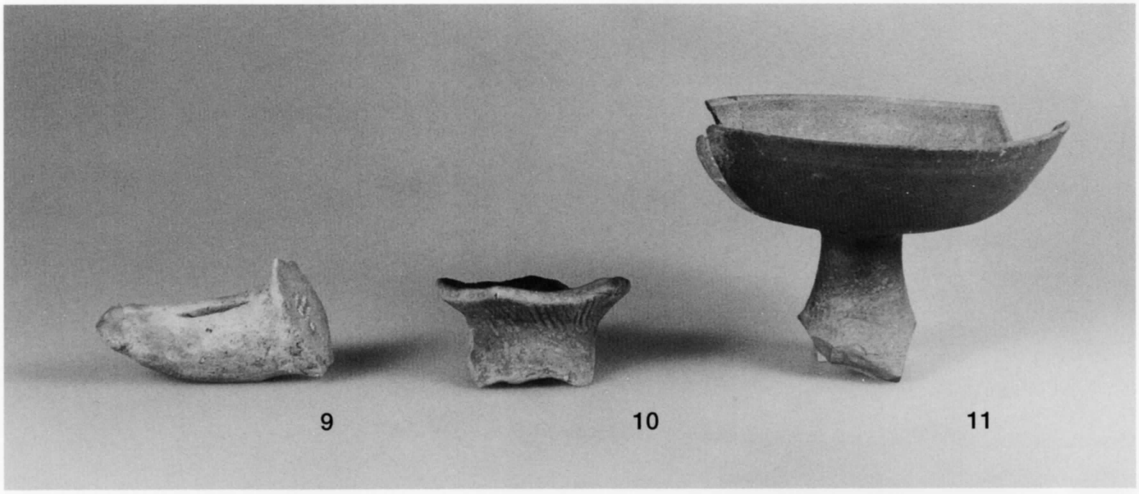
1．駐車場予定地Ａ遺構全景（西から）

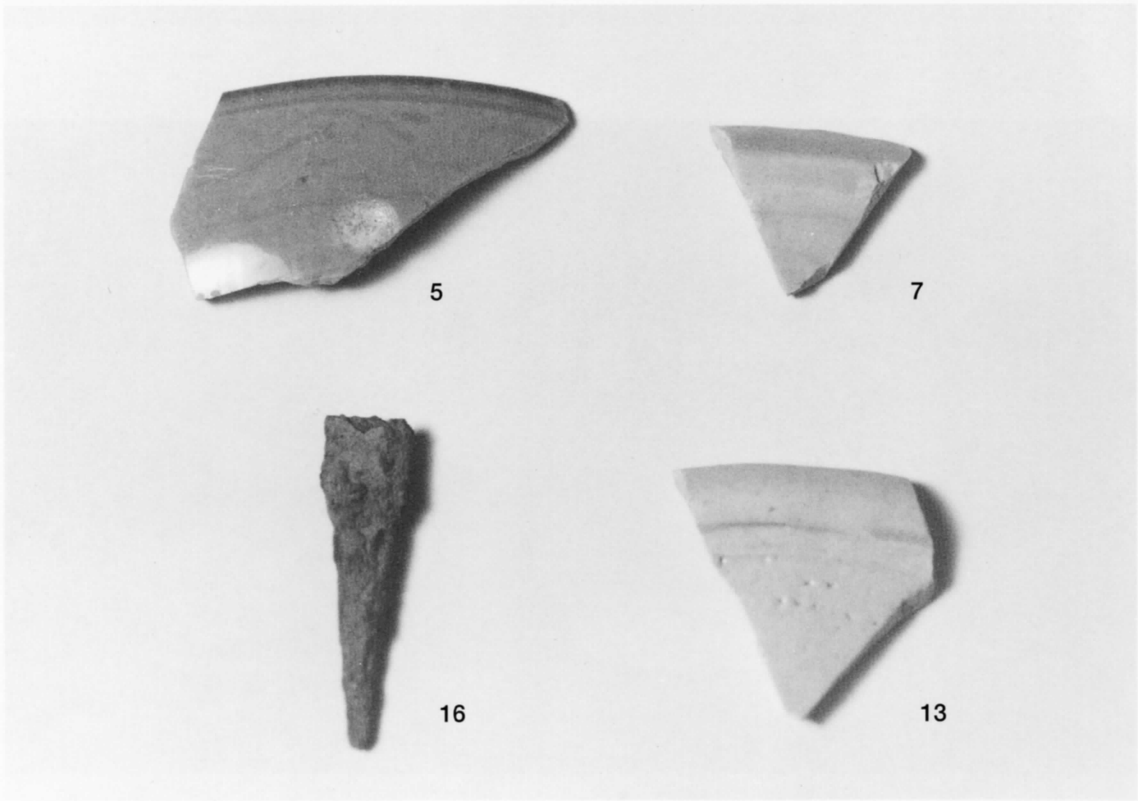


2．駐車場予定地Ｂ遺構全景（西から）

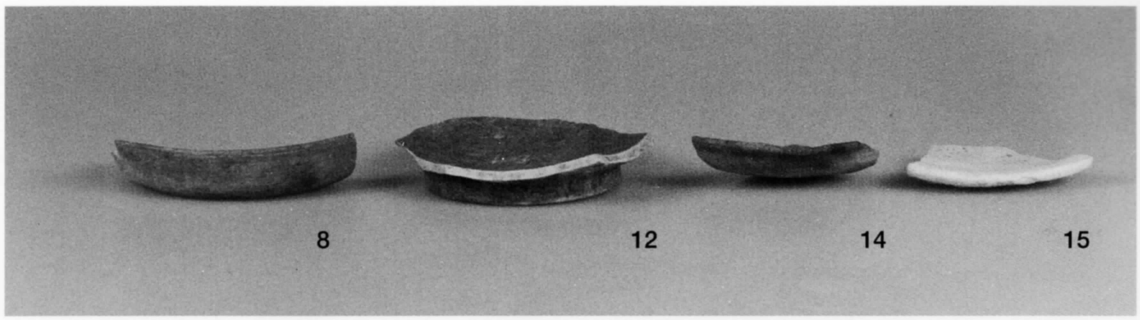
図版5 出土遺物

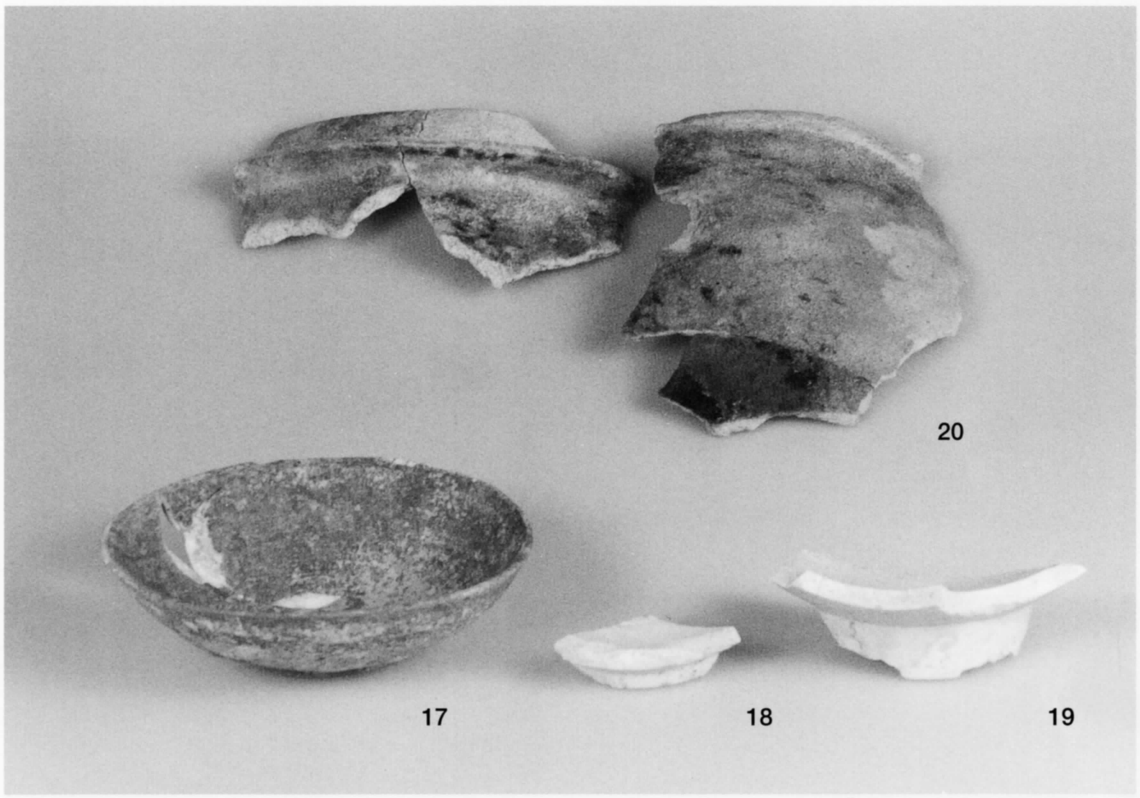


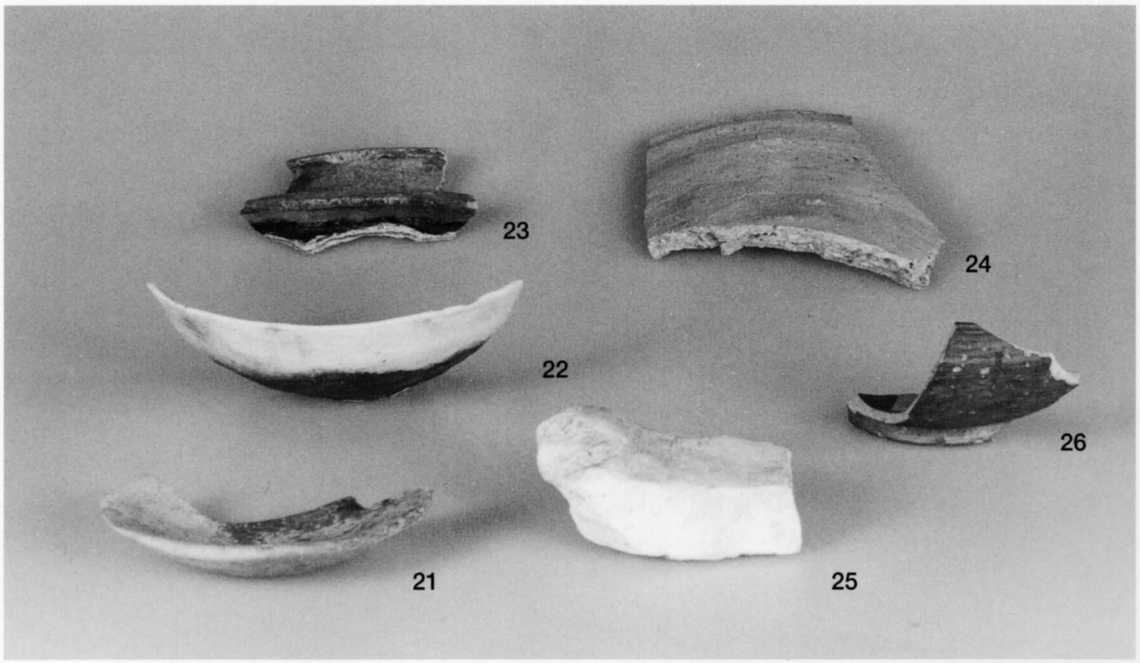




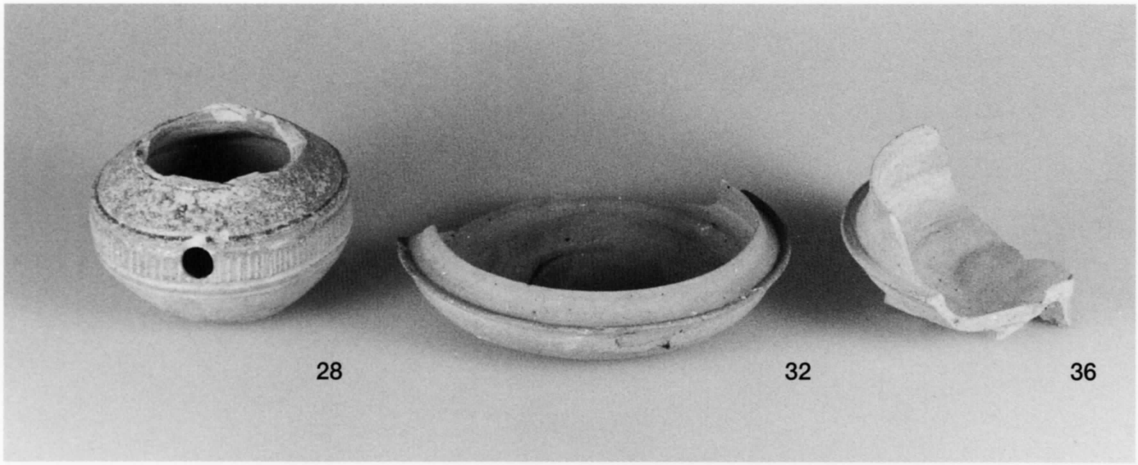
図版6　出土遺物

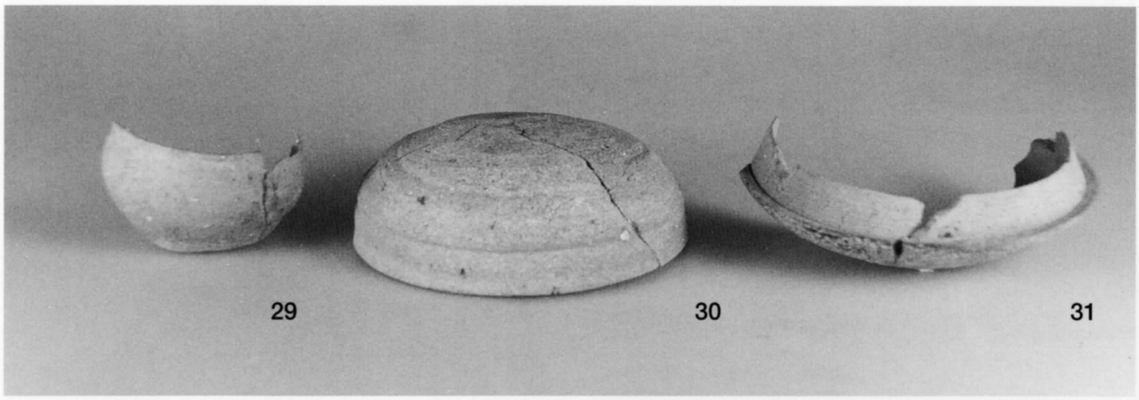


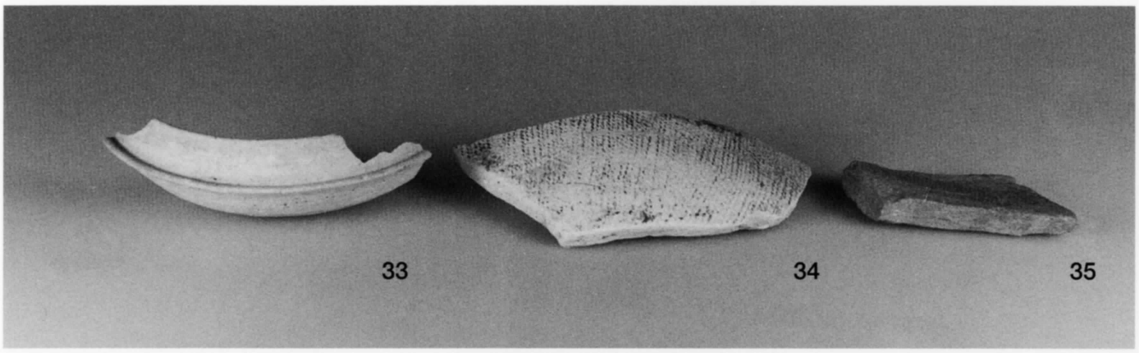


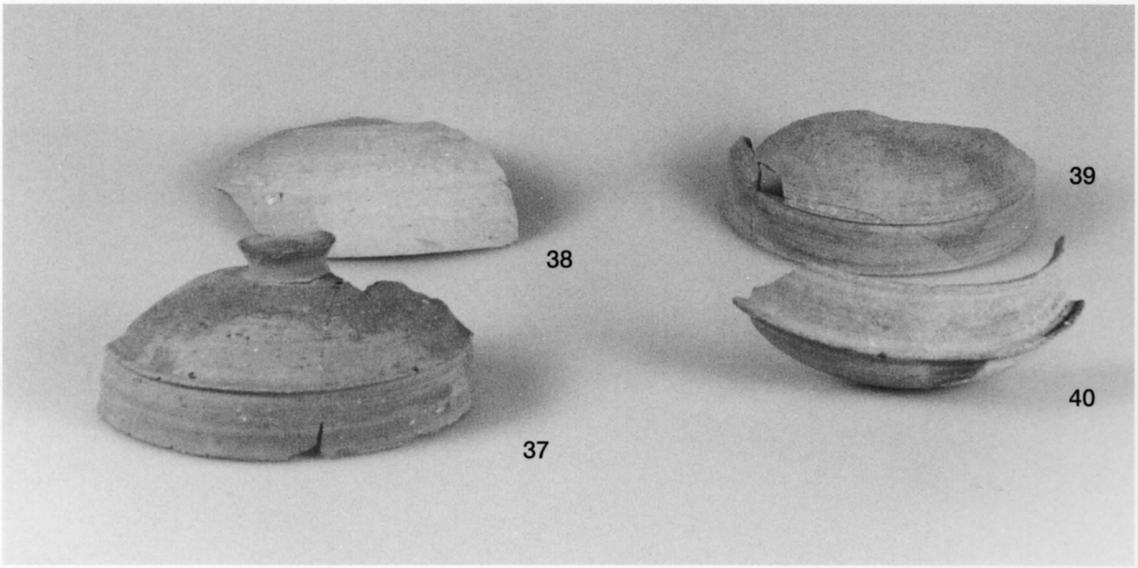


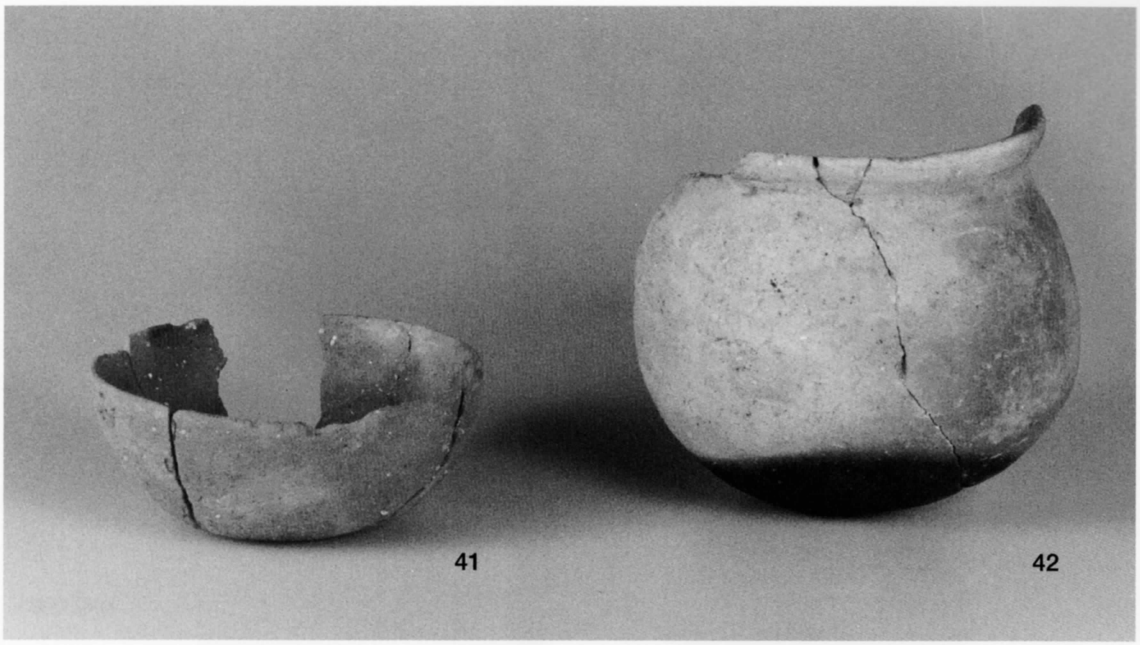
図版7 出土遺物

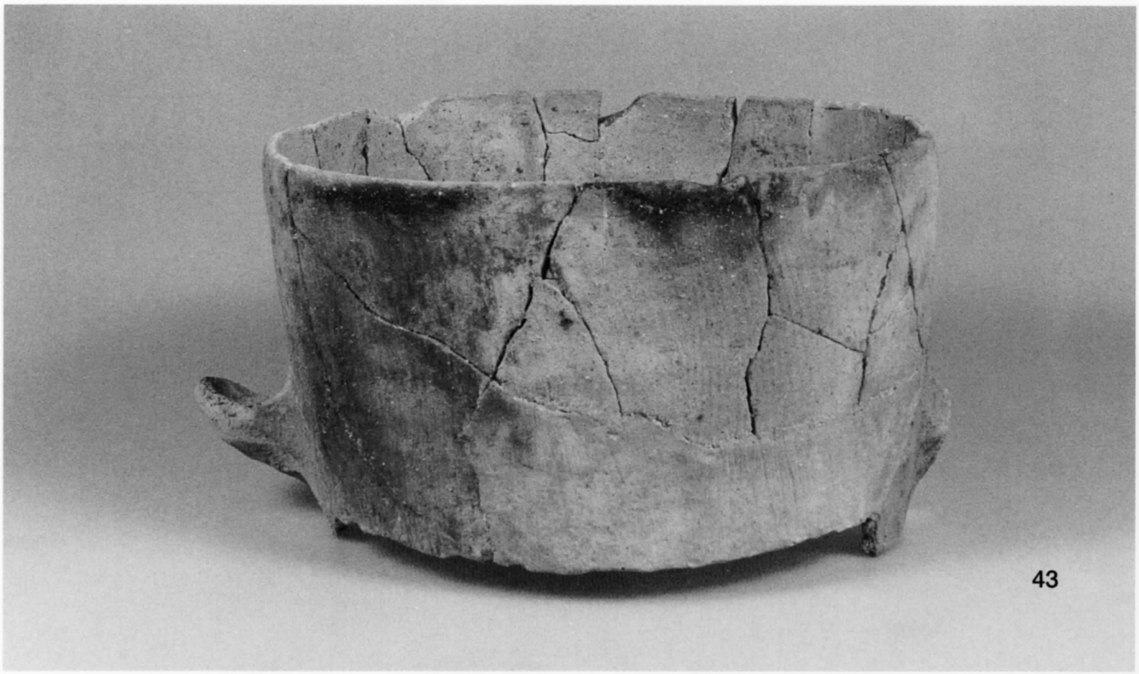


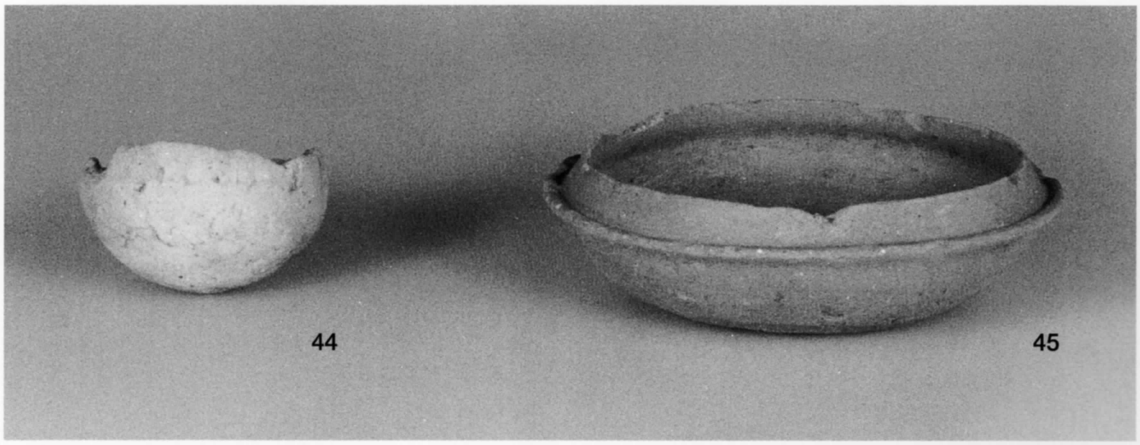




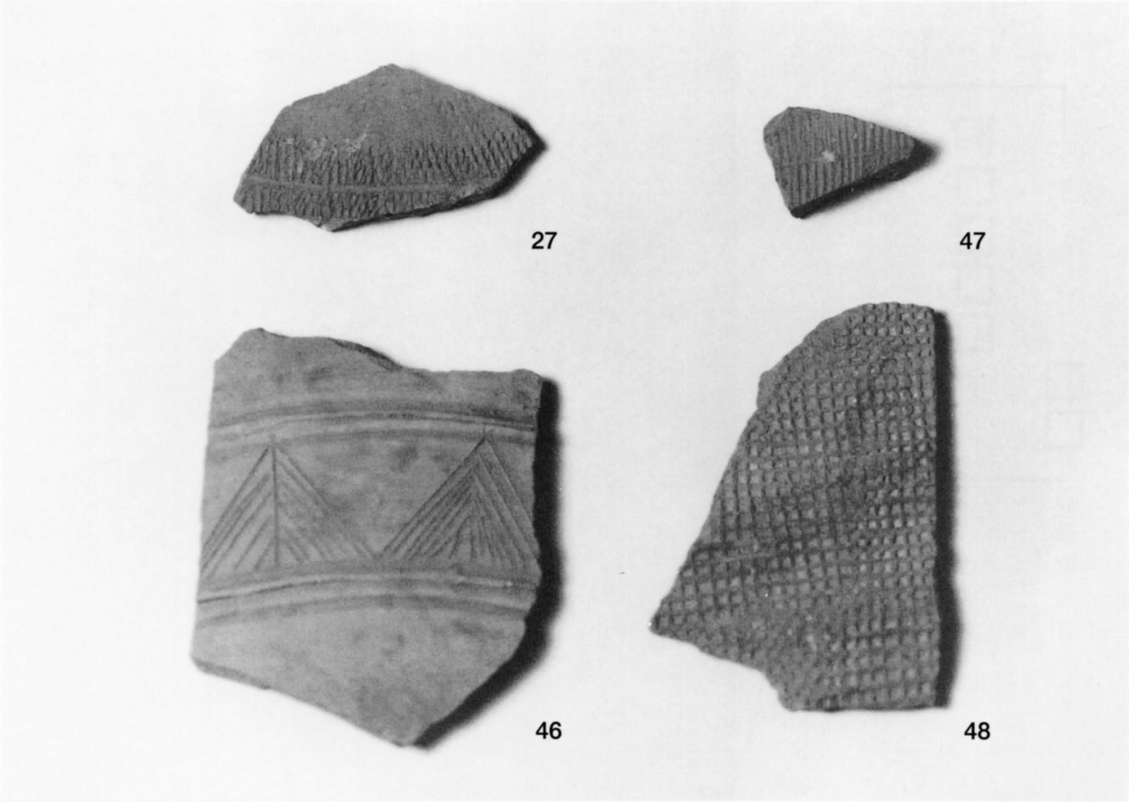


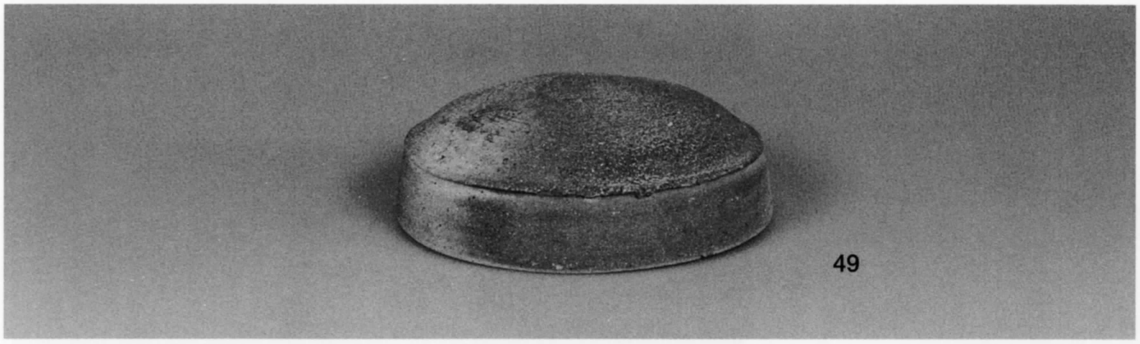

41
42

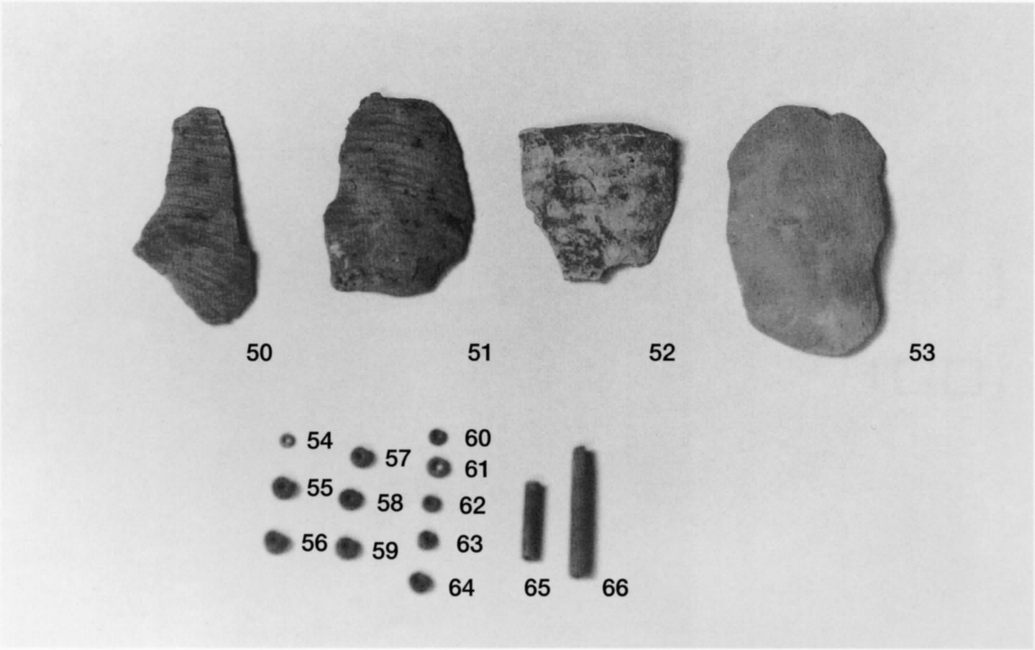

43


44
45

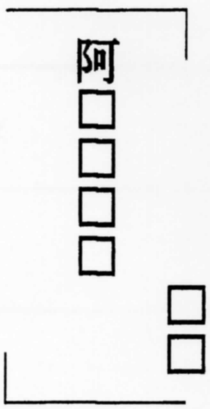
図版9 出土遺物

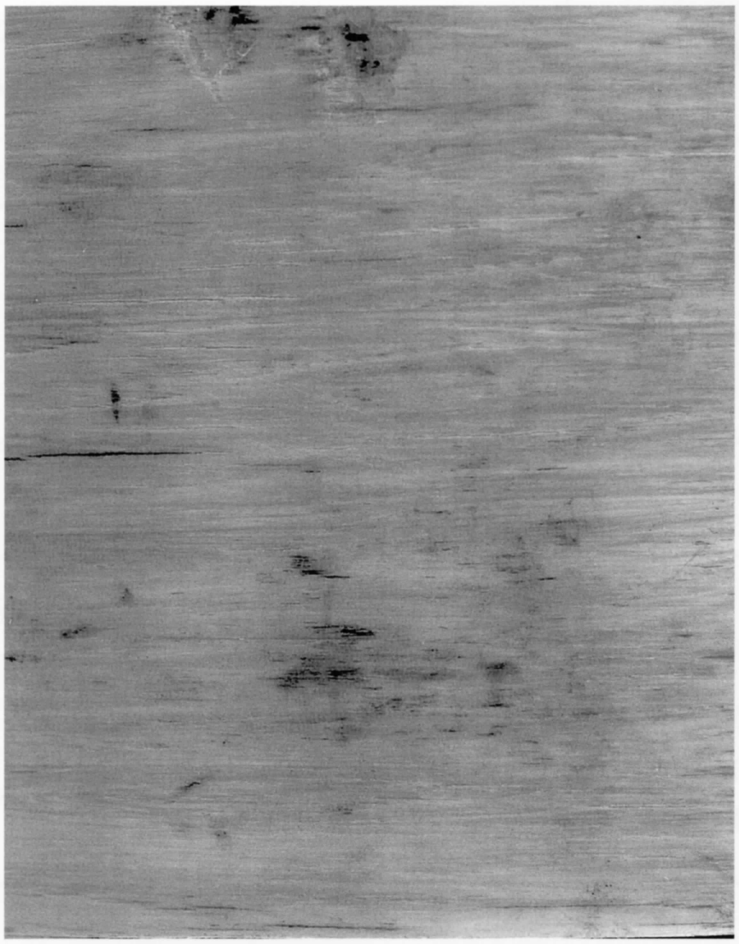






図版10 出土遺物





[圭刀]

「□□」

報告書抄録

ふりがな	ならいいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	奈良井遺跡発掘調査概要報告書
編著者名	村上　始
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501　大阪府四條畷市中野本町１番１号　　TEL　072-877-2121
発行日	2003年（平成15年）１月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ならいいせき 奈良井遺跡	しじょうなわてしなかの 四條畷市中野三丁目地内	272299	34° 44′ 16″	135° 38′ 44″	平成14年 8月19日 ～ 10月7日	1,009㎡	共同住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奈良井遺跡	集落	古墳時代・ 平安時代 中世	掘立柱建物跡・ 溝・土坑・井戸	製塩土器・滑石製 臼玉・滑石製管玉 韓式系土器・白磁	石組み井戸 （墨書曲物を 伴う）

奈良井遺跡発掘調査
概要報告書

平成15年１月発行

編　集　四條畷市教育委員会
発　行　四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町１－１
印　刷　川西軽印刷株式会社